長田秋濤譯

曰くアレルト、曰くデクーヴェルト、山の如き二大艦は今やポートマスを解纜せんとす、彼の指す處は果して何處ぞ、朔風骨を吹いて、天地殆ど凍盡せんとする時、身を挺して極北沍寒の海を斷ぜんとす、壯志凜々惰夫をして爲に起たしむ、噫二艦の之く所、鬼神も爲に感じ、魑魅爲に走る、壯なる哉其圖、勇なる哉其志、我は汝に氷海の邊に從はむ。

北氷洋
長田秋濤譯

北氷洋

長田秋濤譯述

第一章

英國第一の軍港として其名を世界に轟かして居るポート、マスの帆檣林立せる中に巍然として横はれる二大艦がある、是ぞ人跡絶えたる北極に向つて今や錨を揚げんとするアレルト號及デクーヴエルト號である、

彼等が傍に横はれる諸大軍艦に比すれば、其形は小なれど、其船躰を檢するに當つては堅牢なる事實に無比である、此くの如き構造にあらざれば到底北氷洋に於ける氷塊と戰つて之に打勝つ勇氣はない、アレルト號は既に數度の遠洋航海に熟れ、デクーヴエルトはダンデーに於て、

鯨又は海豹の獵の爲に構造されたもので、既にテルヽ、ヌーヴ、等に短期の航海を試みた經驗のある船である、船躰の構造は無論他のものとは異り激烈なる寒氣に堪え、氷塊と戰ふ準備は整頓して居る、殊に其頑固なる形は如何なる軍艦も到底之に比する事は出來ない、海獸を獵する溜などは殆ど行屆いて居つて不完全なる事は一つもない、三年間の食料などは既に積込まれ、船中餘す場所は一もない、加之到底是丈けの貨物を持つて北氷洋に進むは危險なるが爲め、特に一の船を出してヂスコー島まで我々の船に附屬せしめて貨物を運搬せしめる事にした

特に予が此旅行に就ては同情を表さるゝ者非常に多く、種々なる紀念物は山を爲し殊に、陛下及皇族殿下よりの御下賜品は實に我々臣民として無上の榮譽を辱ふした。其外我々の友人等より惠贈されたるものは書物、幻燈、ピヤノ、繪畫、金銀等であつたが其中最も予をして感激せしめたのは、曾て北極洋を航海せんと企て、其目的を達する能はずして

歸りし所の士官等が最上なるポンチの四壜と書籍一包其他種々なる新聞紙を贈られたる事であつた。此贈物の包紙にはアレルト號に於ける我が朋友に對して基督祭の紀念と云ふ文字が書かれてあつた。其他種々なる玩弄物又は冬の長き夜の欝を慰めん爲めの遊戯道具など、殆ど數へ盡されざる位である、全英國を擧げて我一行を送らんとする有樣は殆ど狂さむばかりであつて此船に態々駕を枉げたる高貴の人を擧ぐれば、先づ皇太子殿下を初としてエヂンブルク大公爵、其他ウェニー皇后陛下であつた。

斯くて準備も既に整ふて出帆する事になつた。

五月二十九日、此日は即ち以前より出港の期と定めて置いたのであつたが、何となく暗澹として、小雨は降り來り悄然として我行を送らんとする如き有樣であつた、正午頃に英國海軍總督は小蒸滊船に乘じて我々の前途の無事を祝さんが爲めに來られたが、總督去つて後は此行に

上らんとする乘組員の家族等は袂別を表する爲め麕集し來りて、船中は非常に雜沓を極めた、斯くて予が命令を下したる時刻、即ち午後四時に一分一秒の差もなく船は船渠を出で、一時に起る雷の如き萬歲聲裡に送られてポートマスの港口を過ぎた、此時初めて雲は晴れ日光は瞳々として名譽ある我行を送らんとする如き有樣を呈した。

實に此日の概況を記るせば、予が此地を出立する當日即ち五月二十九日の二三日以前より英國の各州より我行を送らん爲めに來れる旅客は殆ど潮の如く入來り未だ曾て見ざる所の大盛況を呈し空前絕後の劇を演じたのであつた、船渠の傍よりサウサシーの城に入るまでは人を以て埋められ徐々として船の進むに隨つて萬歲の聲は間斷なく我々の耳を打つて來た、加之海岸に赤き帽子を被りて正立せるは我行を送らん爲に政府より付せられた儀仗兵である、軍樂隊は玲瓏たる音樂を奏して我行を盛にし、又其將來を祝するの曲を奏して居る。

嗚呼、我々は實に空前絕後の名譽の歡待を蒙り此くの如く我行を盛んにするに於ては、實に我等が心中の悅びは殆ど名狀すべからざる程であつた、天幸に我々を助けて目的を達せしめ、復び此くの如き名譽ある歡迎を受ける事が出來たならば、其時の嬉さは如何あらんなどゝ空想を描くと共に前途北極の渺漠たる大氷塊に生命を賭するを思へば、又何となく一種悽愴の感に打たれる、

此くの如き歡聲々裡に一の不幸が到着した、是は一行の不幸なる前徵ではなきやと人をして感ぜしめた、それは即ち一人の水夫が帆檣の上より水中に墜落した一事であつた直ちに之を助け、別に異常なく其事は濟んだが、一時は殆ど船員一同に嘆聲を發せさせた、

風は益々順風にして我々の船の後に隨ひ來りし遊船は彌々我々の船と進行なす能はざる地位に來りし手巾などを振りつゝ立去つた

プリーマスに碇泊したるのは即ち其翌朝である此處の鎮守府長官は、我々の船に來られて同じく前途の無事を祈られたが、我々は此プリーマウスを出發するに際して、是が我國を見る最後であるかと流石に殘り惜しく思はれた。

天氣は清朗にして第三日目にパントリー灣なるベァーヴンと稱する小港に碇泊した此處にて鮮肉を積むだり、又鄕信を受取る事を得た、其間に予は船を降りて上陸し、青々たる草原を歩行して殘れる春の花などを摘んで心を慰めた。

六月二日此地を出帆した、此時より最早鄕信を得る事は出來ない、唯だ夢を鄕關に通はすのみにして、我が最愛なる妻子の有樣などは是より數年間聞く事を得ざるのである、日は全く暮れざる爲め愛蘭の山色鮮かに我が眼に映じ、海上を眺むれば僅に行を等ふせる二艘の帆影と、アトランチック洋上に沈み行く夕陽を見るのみである。

第二章

翌日以來、最早大英國女王陛下の領土は勿論曇なき空、煌々たる日光などに暇を告げた。此時よりして天候は次第に穩ならず鼠色せる雲は低く垂れ不愉快なる細雨は降り來つた、

六月五日、アレルト、及びデクーヴェルト號の進退をして自由ならしめん爲め運送船クルールに命令を下して我船に附從せず、自由にヂスコーに向つて進行せよと云ふことを以てした海上に出でゝより彌々船員等の健康にして且つ忍耐强き事を確めた、殊に船員等の和合と云ふものは、予をして大に滿足をせしめたのである。

醫員は間斷なく遠征隊員の物質的腦力を檢査し、之を帳簿に掲げて詳細なる體格表などを作る事に汲々として居る、事務長の如きは船員が新鮮なる海上の空氣を呼吸して非常に食慾の增進せる爲、航海中の準

備に貯へたる食料品が果して充分なるや否やを氣遣はれた、此航海に於ける船員は船が非常に食料品を積んだ爲め、其室狹隘にして僅に少量なる麥酒を携得た位である、併し船庫には葡萄酒リキユールなど貯藏してあるけれども萬一此航海が二年以上に渉る時には非常なる節險をしなければならぬ爲め、事務長は豫め前途を氣遣ふて、日々ゼレーを二壜、一週間にポルトーマデール一杯を給與するのみであつた、ブランデー又はウイスキーの如きは二週間或は半月に一壜を得る事が出來る天長節又は其他の大宴會を催す際に於てはポルトー酒を傾ける事に規則を定めた。

アトランチックを航行する間は天候常に悪くして、船躰の動搖甚しく、到底物を一定の場所に置く事が出來ない位であつた、或日の事予は船室に這入つて見ると墨汁壺は倒れて、美しき毛氈の上に黑き大河を作つて居る、我々は殆ど珠の如く船中に轉つて居ると云ふても宜い位であつた。

十三日。怒濤は山の如く高まり來つて我々の船は暴風に舞ふ一片の木の葉に等しい、夜間になつて一の蒸氣船が我々の船の傍を通つたが、是はクエベックに往く船であつて、互に火を上げ相圖をして別れた、それより數分の後に怒浪は甲板の右側にある家畜箱を洗ひ去つて船中の食料に供せんとしたる鷄は總て浪の爲に奪はれ、僅に二羽を殘すのみになつた。

此暴風雨の爲め遂にデクーヴエルト號に別れたがヂスコーの海岸に着く時分に漸く其影を見る事を得た、此くの如き暴風雨の中にあつても博物學に熱心せる士官は一の珍奇なる材料を得た、其晩の事である、怒濤は甲板よりして士官室の中にまで侵入して來て、船躰の動くと同時に水は左右に震動し、船中に大湖を拵へた時に、博物學に熱心なる士官は一人我部屋に夢も結はず輾轉反側して居たが、洋燈の光に此船

中の書齋に於て異樣なる一物を發見する如く思はれる、それ故に水を排して、此神秘的の動物の一二を捕へた、それは顯微鏡の力を借るにあらざれば此奇物の眞躰を充分に看破する事は出來ない、直ちに顯微鏡を備へて熱心に之を觀察すると、豈圖らんや是は家畜の食料として貯へある蕎麥粉の浮んで居るのであつた、

速力は最も遲くしてダビス海峽に近くに隨つて我々は第一の氷塊を何れの所に於て發見する事が出來るや否やの問題に就て議論などを試みた

二十五日グリンランドを距る遠からざる所に於て英國の方に向つて進む政府用の蒸滊船に遭遇したによつて、通信を爲さんとしたけれども道遠くして我意を彼の船に通ずる事が出來なかつた、斯の如く遭遇すべき船は是のみにあらずして恐らく他に便船があるに違ひないと云ふ事を考へて、船員は殆ど寸間も眼を海上より離さない彌々ダビス

の海峽に進むに隨つて常に航海者が大鼻鯨と呼ぶ大魚の遊泳するを見た、長さは殆ど六米突より七米突に及び齒は內部の顎に生じて居る、此動物の一匹に付いて數百斤の油を得る事が出來ると云ふ話である、それのみならず一大死鯨が漂ふを見た若も鯨獵船が之を見たならば如何に悅ぶであらうか、

アレルト號は程なく其近傍を航行したので我々は之を熟視する事を得た。乘組の一員に有名の獵漁家が居たが、此漢は死鯨の價格が實に二萬五千法以上に當るといふて、腕を扼して殘念がつて居た。然し北氷洋探險の途中なる我等には、死鯨は何の必要も無いから漫然經過したけれども、若し鯨獵者であつたならば、直ちに投槍を以て刺すか又は短劍を以て突き殺すのである、其他マルスアン(海魚)ロルカル(海獸)の漂ふを見たが、是等は鯨などゝ其色を異にして居るが爲め充分に遠方より之を識別する事が出來る、時としては是等の動物を獵する事がある

が、長さは殆ど九十ピエーに及ぶことがあるが、スコルシビー氏は百五十ピエー以上の物を見たと云ふ事である、彼等の食物は重もに鯨にして、是等を一頭捕獲すれば其胃中より八百より九百に至る鱈を發見する、此動物は重もにグリンランドの南より西の方に棲息する海獸である。

二十七日。寒暖計は彌々降り天光、薄らぎて氷洋の近けるを知る。霧深きが爲め氷塊との衝突を避けんとして我々は非常に注意をした、此等の氷塊たる一見實に眼を眩せしむる程奇麗であるが、其危險に於ては實に名狀すべからざるものである、果して其豫防は水泡に歸さなかつた、午後四時頃は大洋上に流れ來れる初めての氷塊に遭遇した、我等は實に此氷塊の中に十五箇月以上の日子を經過しなければならぬと思ふと同時に船員一同竦然として歎聲を發したのである

翌朝失望岬に接して雪を戴ける高山を眺めた、此絶頂は千五百八十七

年ジョンダビスが其旅行の不結果より失望の極に名けたる一名である、是より氷塊は一層數を增し、大なるものは峨々たる大山の如く見える船員等は追々此氷塊に馴れて氷塊を見ながら洒落戲れを云ふやうになつた、海豹は此氷塊の上に惰眠を貪りつゝありしが、我々の船が其處を過ぐる時分には驚きたる容貌をして眺めて居る、是には二つの種類がある一を氷鼠と稱へ、一をグリンランドの海牛と呼ぶ又此邊に於ては各種の鳥が船の周圍を取捲いて飛翔するので我々は終日潮を散する事が出來た

七月一日。天澄み海浪穩にして、太陽は輝き渡り、今までの如き不良な天候に引代へて、此清朗なる日に會し我々の悅びは譬かたなき程であるが漸次氷塊の數を增すに隨つて北氷洋に近けるを認むる事が出來る、正午フヰスカルチーの海岸を横斷して彌々碇泊場に近くやうになつて來た、デクーヴェルト號は幸にして此地に於て我々と出會する

事を得たが、彼等は太平洋に於ては我々の如き苦みを感じなかつたといふのは實に幸運である。

七月四日。北極圏内に進んだ晝は長くなり、殆ど夜と云ふものはない、それ故に蠟燭、洋燈等の必要はない、太陽は常に光を送つて居る、

六日。ゴード灣なる丁抹の殖民地の要塞なるリエヴリーに錨を投じた、此地の有様は實に淋しく、して見る影もないが、北部グリンランドの最も必要な土地であつて駐劄官などは常に此地に住ひ、丁抹及エスキモーのコンキス人種を支配して居る、砲臺より放てる九發の砲聲は我々の到着を歡迎したのである、實に此地の歡迎と云ふものは、殆ど筆紙に盡されない位であつて予は茲に特筆大書する所である

第三章

三十四日間の怒濤と相闘つて漸く靜止する事を得たのは實に船員一同の悅びであつた、小滊船の動搖は最も不愉快を感ずるものであつて、

良好なる港灣の内に這入つて初めて靜止する事を得る程愉快なものはない、我々は數日間長途の疲勞を癒する事が出來たけれども運送船ルール號は此處に於て總ての食料又は種々なる物品を初め石炭等をアレルト及びテクーヴエルト號に積替なければならない、其日の長き彼の三更に點印する太陽の影は宛も日中と同樣な光りを放つて居る、それゆゑに船員等が勞働をしたり又は時間外の勤務などをなした時にはボダファーヴンより上陸して此地の婦女等を相手に舞踏する樂みを與へられたのである。

ルール號より積替へたる荷物の運搬が濟んで以來アレルト及デクーヴエルト號の混雜は名狀すべからざる程であつて、甲板上には殆ど左右前後の區別なく。石炭などの間にまで荷物が散在して居る、流石熟練せる船員等も如何にして此山の如き荷物を纒めんかと云ふ事に

頭を惱ます如く見える中甲板も尙ほ之と同樣であつて殆ど歩るくに席もない位である、之に加ふるに橇を曳かせる爲めエスキモー犬二十疋を購求した、然るに是等は吠え鳴き、嚙み合ひ殆ど手に餘るやうな騷ぎをする、之をして柔順にせしむるには、數日間鎖に搦けて馴さなければならない。

其犬等の騷擾は宛も戰場にある如き鹽梅であつて、譬へば是等の中の一ッが相手を伏せて自ら第一位に着く時は是が犬群の王となる、而して其臣下を統轄する有樣は所謂專制主義を用ゐて居る、然るに他の諸犬は順々として此命を聞くやうに見える加之食物の如きも、最も好其なる所は先づ第一に此犬王が喰べる、これより次第に階級があつて、食物を爭ふ事なく、宛も人間の王樣と云ふやうな風をして居る、是等の犬は馴るゝまで甲板上に養ふて居つたが、自然に馴れて船員等の愛する所となつた、此犬を監督し充分に訓練せん爲めスミス氏は一人のエスキ

モー人を雇ふて來たが、此者は鐵砲と一つのカヤックと稱する船を携へて犬群の大總督兼通辯役としてアレルト號に乘船した

此エスキモー人は名をフデリックと呼んで非常に熟練せる獵師である、容貌温和にして擧止動作も靜肅であるが爲に、船員等より非常に愛された、夏の終なき日は此遠征隊員の今日に到るまで知らざる所である故に、何時睡に就き何時覺めて宜いか分らぬ、三更は過ぐるも尙ほ音樂の音、笑ひ聲は絶へず踊り騷ぐ土地より風に吹き送られて來る、船員等はエスキモーのカヤックを借りて彼等と共に樂んで居る、此カヤックを漕ぐ事は最も困難であつて非常なる長日月の經驗を積まざれば熟練する事は出來ない

我々の中の上席士官は此規則に外れて殆ど全世界中に於ての最も熟練する漕手であつて如何なるものと雖ども更に驚かない、カヤック如きも此士官の爲には長き秘密を保つ事が出來なかつた、此時に同船した

るダヴリユー氏は、友人が巧みに此カヤックを繰るを見て羨望に絶へず自ら代つて漕がんとした、然かるにカヤックは轉々して方向正しく進むことを得ざるのみならず遂に水中に陷つて了つたアハヤ溺死せんとする所を漸く救はれて命を拾つたのである。

加之ならず此地に於ては種々學問上の樂みは殆ど無盡藏である、礦石の事に就て種々なる研究するのみならず、又寫眞等の機械を應用するもあり、其他地理學者、植物學者は研究に頭を惱め上席士官及フエールデン氏は博物學上の研究をせんが爲めオビフヰツクに舟行し而して墜落せる空中飛動物の材料を得んとした

凡そ長く船中に居つて陸地を踏まないと云ふものは、最も不愉快を感ずるものである故に士官及水夫の如きは諸々の懸崖絶壁を跛渉する事を無上の樂として居つた、ソンゲンマルク、フジエルド山は海面を拔く事四百米突にして北方に聳え、之を登るには隨分困難を感ずる、我々

は今より十二年前此地に於て氷の爲め犧牲に供されたるフーボレーと稱する鯨獵船が尙ほ未だに其帆檣を殘して居る美しき一小灣より上陸する事になつた上陸するには隨分困難を極めた此山に登つて四方を眺めたる景色は實に一種の壯觀である、グリンランドの全土は一目の許に集つて居るのみならず、ボダファーヴンの市街は手に取る如く、我々の三艘の船は玩弄物の如く見える、バレーン島はヂスコー灣に纒綴して居つて、宛なから地面の如き趣きをして居る、海には幾百幾千となく氷塊が漂ふて居るのみならず、後ろの方にはヨヤコツブスファーヴンの大氷田が横はつて居る、此處は蚊軍非常に多く我々を襲撃して殆ど靜座して居る事が出來ない、此北極の地に於て斯くの如き熱帶に於て見る所の大敵の發生して居るには驚いた、此山を降るには登る時と同樣に困難を極めた、時としては雪の氷れるに乘じて辷り降りる時もあつて、漸く船に歸る事が出來た

ポダファーヴンに碇泊中は天氣都合も好く太陽は常に一種の光線を近傍の諸山に放つて居る、實に此港は我々に好紀念を與へた此地に駐剳せる諸氏等は、或は自分の家に、或は宴會に我々を厚遇した、是は筆紙に盡くされない、殊にワルール號の船員及士官等に向つては謝さなければならないのは、我々が此遠征旅行を試みるに就て種々奔走されて、必要品を我々に贈られ、我々が北氷洋上に漂ふ用意をして呉れた事である

七月十五日。午後の砲聲は袂別の意を表し檣頭には我國旗翩々として、飜り、此地を跡にして出帆しつゝ無數の氷塊の間を浮んでヂスコ島の南岸に沿ふて進、みリッテンヴェンクに向つた、此地へは翌日到着する事が出來るのである、彌々進むに隨つて、風景は益々麗はしくなる山々より落つる水は瀧をなし或は激湍となつて海中に流れ込む、是は總て山上の雪が解ける結果であつて是等の水が岩より岩に激して珠玉

を飛ばす有樣は實に絶景である、殊に幾千萬の鳥は此邊に集つて居つて、宛も幾千萬の兵隊が同じ服裝をして集つて居る如く見える

ワルール號は明日我々と袂を別つて英國に向つて歸るのである、茲に於て我々が本國に便りをする道も絶えて仕舞ふ、それ故に手紙を書き、又は其地まで同伴せられたるアレルト號船長の甥なるマークファームに暇乞をする實に一分間も暇がなかつた、此人が我々と机を同うして居る間は尙ほ文明界に居るやうな心持がした、然るに此人が去つて以來何となく淋しさを感じて故郷を思ふの念は彌々倍して來た、此旅行中氏を想ひ出した事は屢々であつた。

十七日。朝四時、ワルール號は全速力を以て石炭を積込む爲め此島の北方に往つた、アレルト及デクーヴェルト號はリッテンヴェンクに於て、六匹の犬を求めた、此地の景色は唯だ曠大と云ふのみにして記るす程の事はないが種々なる形狀を爲せる氷塊が一種の光景を呈するの

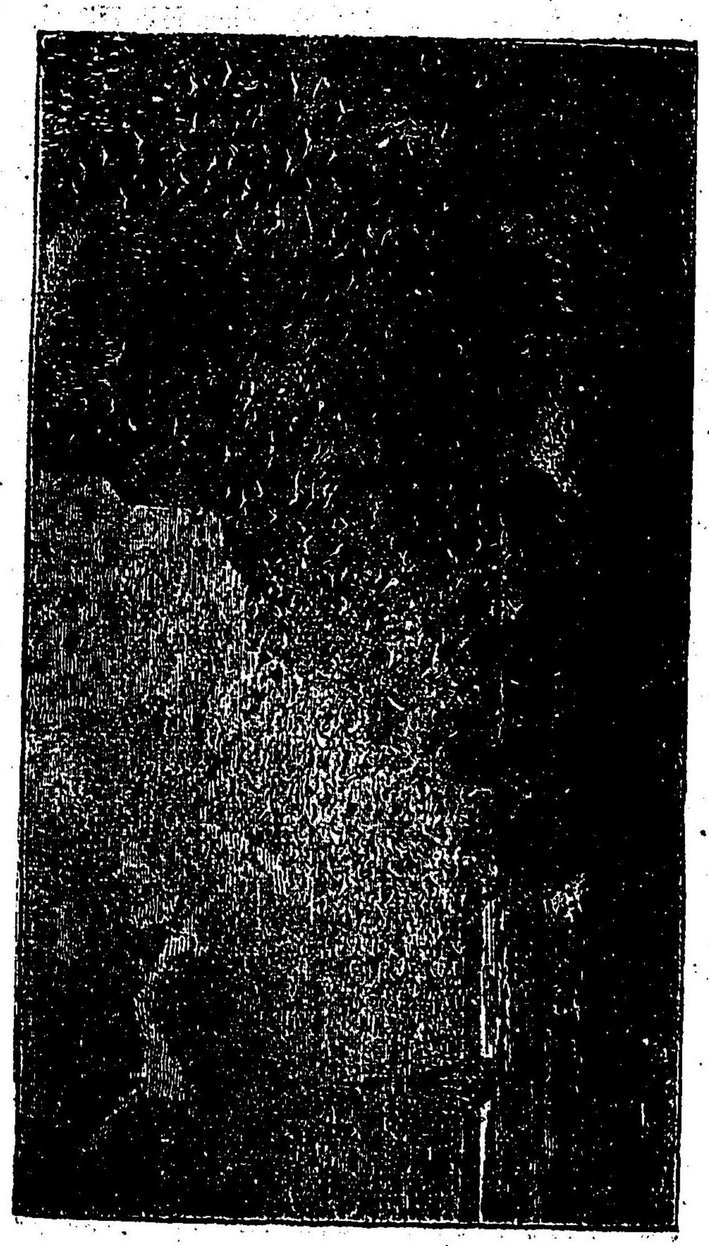
みならず、其危險なる事一分間も心を忽にする事が出來ない。

石炭の積込も濟みたるものと見え、ワルール號は錨を上げて將に出帆をするやうな有樣である、我々は依頼する手紙を托せんが爲め此傍に船を着けた、併しながら霧深くして、船と船との間に於て言語を交へる事も出來ないやうになつて了つて唯だ僅に相圖に依つて袂別の意を表する事が出來た次第に霧が深くなるに隨つて氷塊の危險は一層增して來る、餘儀なく小艇を下ろして三名の水夫に必要なる機械を載せて非常の變に備へる事にしたが、氷塊は流れ來つて此船と衝突して其内の一人は海中に陷つて影を失ひ、其他の二人は漸く船員一同の助けに依つて救助する事を得た、翌朝リーガーの海峽を出たが霧は彌々深くして到底此邊の景色などを見る事は出來ない、唯だ目前に大なる氷塊が流れて來るのみである。

十九日夕刻に至つてアレルト及びデクーヴエルト號はプローヴエン

丁抹殖民地に碇泊した、此處には此地を統轄する人の家もあつて、先づ此洲の首府など云ふても宜い位である我々の船が到着するを見るや否や此統轄者と稱すべきものは直ちに船を漕ぎ付けて頻りに祝砲を放たない事に就いて謝罪をした、彼は我々に向つて云ふに、御覽の通り大砲はあるが誰も大砲の使ひ方を知りませんと其時刻は午前一時頃であつたが岸の方には白き靴を穿き白き毛の着物を着て短き股引を着けたる婦人等が我々の到着したるを見て奇妙な顔をして眺めて居る。

此處に於て安眠を貪りつゝありし犬は驚いて吠え初めたが、船の中なる犬も之に相應じて吠え出した、其聲は殆ど皷膜を破らんとするやうな騷ぎであつた、此地に碇泊したのは蓋し理學上の研究をする爲であつて直ちに出帆する事にした、此地の者は正直にして此地の統轄者の妻の如きは最も善良にして曾て予が此地を歩いた時分より交誼を



ギルモール(島)群を爲して獵夫達を掛

厚ふした一人である、尙ほ此地に於いて一人のエスキモー、ハンファンドリックと稱する獵師兼犬の監督者を雇入れた、此者は既に亞米利加遠征隊と共にスミス海峽の方に旅行したる者であつて、我々に向つては最も價値ある人間である

二十一日。午後プローヴェンを出立した、數時間の後彼の有名なるサンダーソンと稱する絕壁の下を通つた、此處に船を止めてギルモールと云ふ島を獵した、此數實に無數にして僅か數時間の中に百七十羽を得た翌日ウベルニックに投錨し其夕此地を出發した。

第四章

エスキモー人の水先案内の經驗と熟練とに我運命を委ねてユベルニウヰックの西海に經綴せる島嶼の間を徐ろに過ぎて北進せるが此間實に非常なる勢ひを以て流れ來る氷塊と大爭鬪を試みた。

先づ我々が第一に準備するは、即ち此大爭鬪に於て敗を取りしならば、如何なる方法を取つて遁れんか、如何にして我が船員の生命を全からしめんかを考へるのみである、それ故に萬一を慮つて晝夜怠らず注意をして居る、船員は各々指定された所に番をなし、一朝濟ふべからざる危難に遭遇せる時分には秩序的に小艇に乘移る事の出來るやうにされて居る又氷塊中に取圍まれた場合に於ては如何に此氷塊を開鑿して遁路を求めんとするかに就ては必要なる機械なども缺くる所なく備つた、其他食料品等を甲板の上に荷ひ來つて、破壞の運命に際した時には直ちに之を小艇に移す手段も豫め定まつて居る、衣服は勿論防寒具なども各々携帶して睡るにも殆と之れを離さないやうにして居る、

ユベルニウヰツクを出發して以來深霧は我々の船をして此海中の一島嶼に投錨せしめた、水先案内者は船より降來つて特に此地を熟知す

る爲め此邊の海岸に我々を導かんとした、我々は之を諾して彼等の導く小艇に乘移つて海岸の方に向つて進んだが、霧は深くして呎尺を辨じない、此間氷塊は時々流れ來つてそれに衝突する幸にして船は遲き爲め、左程危險と云ふ事もない、併ながら退潮の時でありし爲め海岸にまで船を着ける事が出來ない、暫く之を待つて再び進む事になつたメルヴヰル灣の危險は諸君等の充分に熟知される所である此邊に於ては如何なる大船も氷塊の爲に粉碎されて殆ど其影を認めない位になる、吁々此海水や如何に悲慘の歷史を漂はした事であるか、如何に勇猛なる所爲を刻み付けて居る事であるか往時より噂高き此灣の危險を避けんが爲め船長ナール氏は船を氷塊中に猛進せしめた、氣候が酷烈なる時分には此危險を免るゝに就て此策が最も好結果を奏する、若し是程の勇氣なき時分には氷塊中に碇にせられて十四五ヶ月の間氷塊中に籠城する事がある、此氷塊はメルヴ

非ル灣に於ては餘り凝結して居らぬ事があるそれ故に案外氷塊中を免るゝに容易い事もある此理由に依つて多くの船は爾來氷塊中に這入るけれども暫時の間忍耐すれば自然風の針路が變つて氷塊は他の方に向つて流れ出す而して船は其口より流れ出ずる事が出來るやうになる此氷塊中に籠城する間は他の氷塊に衝突する憂はない是が最も安全の策としてある然るに氷塊中に這入らずして氷の爲に壓迫さるゝ事になると非常に危險であつて遂には衝突して沈沒する事になる我々は此有樣を察した爲に本船を進める事にした氷は餘り年數を經ないゆゑか凝結して居らぬ厚さと云ふても三ピエー位のものである殊に天候は非常に麗しく且つ穩かであつて全速力を以て進む事が出來る加之極微の北風が吹き初めて居る事ゆゑ遠からざる中に海水は總て凝結して我が進路を塞ぐ恐れがあるから此期を以て進まなければならぬと云ふ事を信じた併し氷塊は時々我々の進路を妨げる、

其時に際しては非常なる勇氣を以て之を打碎き又は之を排除しなければならぬ海馬其他海豚等は氷塊上に棲息して居るが今日はそれ等を獵するやうな機會を有さない

併ながら船員等は此海獸を見て到底何時までも躊躇して居る事が出來ない直ちに武器を手にして之を打たんとするに際して一頭の白熊即ち極洋に於ける純粹の一大白熊が現はれた是が此航海中熊を見た最初である船員一同は此熊を得んとして各々腕を磨して之を眺めて居つたが獨りヴリユ非ン氏は更に意に介せざる如き風をして寧ろ暖き外套中に其身を置く事を悅んで居つた間もなく船は止り小艇は下ろされた義勇隊は之に乘せられ氷塊の間を漕いで其熊の方角に向つて進んだ此間船は方向を轉じて反對の方に進み此熊の近路を塞ぐと云ふ策を取つた然るに此計略は總て水泡に歸した熊は我々より怜悧にして且つ地理に熟して居るが爲め我々の此處に來るを待たず徐々

として何れへか立去つて了つた、目的なく打つ砲聲は唯だ彼の出發を祝する爲に響くのみであつて影を失つた、諸氏は殆ど狂せんばかりの有樣であつて此寒中をも厭はず或は水中に飛入つて其踪跡を明にせんとする風であつたが、遂に其意を遂げられない。

此邊の海にはメルゞ又はアル、と稱する鳥が飛翔し、又純白雪の如き白鷗が諸々に飛び居るのを見た。

此敵を逃してより三四時間の後に我々は眞正の北氷洋に出た、斯くの如く早く船の進行した事は稀れである、ユベルニウ井ックを出てより此ヨーク岬まで七十時間を費したのみであつた

メルヴ井ル灣は我が後に非常なる勢ひをして暴れて居る、然るに此處は平穩なる麗しき海であつて我々の一行は手を打つて悅び既に其目的を達せられた如き有樣である、唯だ諸所には氷島が現はれて居つて、日光は間斷なく輝いて居る、此處より僅々數時間にしてスミス海峽に

出る事が出來る、我々は即ち今日まで人に知れざる程の一大鎖鑰を通つたのである、我々は是から先き何れの點まで進む事が出來るだらうか、誰も之に向つて答へる事は出來ない、併ながら第一歩は成効したが實際の事業は今日を以て初まるのである、天我を助けるならば我々の目的は必ず達するに違ひない

全躰此地へ來るには二週間三週間を要する位であるに、幸にして此地に來たのは僅かな時間であつて是は既に我々をして天が助ける所の第一着手であると信ぜしむる、斯の如く早く到着するとが出來たのは石炭を空しく費さない、故に此を石炭を以て充分他日の用に向ける事が出來るのである、ヨーク岬を過ぐる時にデクーヴエルト號は陸地近くへ往つて此邊に居る土民に信號をしろと云ふ命令を受た、此信號に依つて彼等の一人が我々と同行をするやうな事になる事を望んだ、アレルト號はカリー島に往つてデクヴエルト號と出會する筈である。

三四吉羅米突の隔りに於て霞の中に見える所の海岸と云ふものは實に一種の奇觀である、到る處雪を帶びて居る高丘であつて其頂きは遙かなる天外にまで聳へて居る其樣子と云ふものは宛も氷塊を見る如き有樣であつた、其間の諸所に氷塊が突出して居つて其形體の奇な事は繪に畫いたやうである、天然的にあらずして殆ど人工的に造られた如き趣きがある此時より東南の風が起つてカリー島へ到着する事が出來ない、我々は此島へは容易に來ると考へたのである、其海上に起る風波の有樣を見ると此邊には氷塊がないやうに思はれる

二十七日。朝此諸島嶼の間を馳せた、而して我々は數時間碇泊して、一艘の船と六十人の人間が二箇月間及八十人の人間が一月間生活するに充分なる食料を下ろした、是は此東北の島に此者等を置くのであつて、我々は直ちに錨を揚げて出帆した、此處で最後の手紙を書いて英吉利に送つたが我々が歸着する前に英吉利に到着するに違ひないと云

ふ事を考へた是丈の食物があれば、此處よりグリンランドの北方なる土民の部落に渡る事が出來る、而して渡れば必ず此邊の人等は大に此人間を優遇するに違ひない此處は即ちカリー島の一端であつて、デクーヴエルト號は幸に此處に到着する事になつて互に錨を拔げて北方に向つて進んだ

北方に進みつゝ我々は非常に麗しき朝にグリンランドの西部海岸を眺めて居つたが此邊は氷山を望むの外氷塊と云ふものはない、バレーヌ海峽は無事に通過して益々北の方に進んだ、ノーザンバーラン、ド島とハーク島との間に這入つた、此處は即ちマヂソン海峽であつて左舷よりはプランス、ド、ガール山を初めとして其他の諸氷山を眺めた、此景色の奇なる、太陽に映じて反對する色の工合、未だ人跡皆て到らざる所に於て斯くの如く麗しき物を見るとは思はなかつた、此邊には禽鳥が非常に多い、彼の小メルグは隊を爲して諸所を飛翔する其他鼠色せる

鴨等、我々の船影を見て飛去るを見る

七月二十八日。朝アレルト及デクーヴエルト號は錨をハートステーヌ灣に投じた、此地は寧ろポートフークと云ふ名で知られて居る、千八百六十年彼の有名なるヘーと云ふ醫師が旅行された所である

第五章

投錨するや否や直ちに朝餐を喫し、船員一同は上陸せんとて其旅裝を調へるに汲々として居つた。

或は彼のカーヌ醫伯が其弟の名を取りてヲヤンと名けたる氷山に往かんとする者もあれば、又博物學の材料を蒐集せん爲め往かんとする者もあれば、或は化學上の研究をなさんとするもあれば、此地に於ての壯大なる狩獵を試みんと企てるもあるが、更に土民は現はれて來ない、我々は此地に來れば必ずエター村には少くも住民が居るに違ひないと

信じて居つた、此エター村は我々が碇泊したる所より僅に四吉羅米突ばかり隔つた所にある、然るに彼等の小屋と云ふものは、寂莫として人の居る氣合がない併し其有樣より察するに、近頃まで其家に人が住つて居たらしく見える、諸所に海豚又は海馬の棲居が岩の間に散在して居つて、此人跡寂莫たるは一時であると云ふ事を考しめた。

船員等は、前述べたる如く種々なる方向に向つて探險を試みんとして上陸した故に、船長及予はライフポートと稱する小灣を見物に出掛けた、此處はポラリス號の船員等が第二期の冬を過したる所である、(千八百七十二年より千八百七十三年に至る)而して千八百六十年に彼のリットルトン島にヘー醫伯が遣したる鐵船を捜索せん爲め出發した所である。

昇旭岬の邊より滿帆風を喇んで進んだが我々は忽ち北より吹く所の惡風に出會して之と鬪はなければならぬ事になつた、氷りたる飛沫は

我が面を打ちて全身殆ど凍結せんとする位である、斯くの如くして漸く五時間の後に一小岬に着いて、初めて手足を伸ばす事が出來た。

上陸をすると同時に亞米利加人が此地に上陸したる形跡を發見した先づ第一に我々の一行より前に來りし所の旅行者に依つて壞されたるカイルヌと稱する人造の小丘を見た、是は恐らく千八百七十三年に此北極に旅行したるチグレス號の船員等の爲したる事に違ひない、それから亦た鐵葉製の箱及一の空革提を見出した、此二ッの物品は異樣なる臭氣を放つて居つたが、是はエスキモー人が此中に有つた物を奪ひ取しものゝ如く考へる、是から少し先きに一小艇を發見したが是は土民の製造したるものであつて、内部には革などが張つてあるが是は白哲人種が監督して拵させたものらしく見える。

我々が船より降りたる所より兩端に於て小屋の破壞したる跡などを認めたが、是は亞米利加人が此地に於て冬籠りをした所に違ひないと

云ふ事を信じた、其他此邊には革提の如き物或は釜、木片及銃などが一吉羅米突の間に散在して居る、其有樣の慘然たるには思はず涙を醵した、其革提の中には所有者の名などが書いてあつた、其他の革提には種々なる書籍等が這入つて居るもあれば又婦人の化粧道具が這入つて居るを見た、是は恐らく此地に旅行したる者が本國に殘したる戀人の紀念物であつたに違ひない、其旅行者は此物品を眺めつゝ北極の凄き夜を慰め、長き時を漸く消す事が出來た事だらうと思はれる、又海豚の油などが貯へてあつたが、此の如きものは長く此地に散在して居る道理はない、恐らくエスキモー人が是等を拾得するに違ひないと考へる

此邊に於て、復た二艘の小艇を見出した、其船にはマウモクポと刻まれてあつたが如何なる意味であるか、一向我々には之を解する事が出來ない、是は恐らく愛斯闌の言葉に違ひないと考へる

又カセラの寒暖計二個が零度以下七十二度の所で止つて原形の儘存

して居るのを見た、我々は此寒暖計が最高點と最極點までを記してなかつた事を惜むのである、それが記してあつたならば、非常なる暑きと非常なる寒さとを知る事が出來たのであつた、我々は書物及機械等を拾得して之を合衆國の政府に寄贈しやうと考へて小艇に積みリットルトンの方に歸つて來た。

夫から漸く三更に至つて船に着く事が出來た、陸の方では船員等が篝を焚いて狩獵に餘念がない、後にて聞けばアレルト號の船員等は馴鹿を一頭得たと云ふ事である、デクーヴェルト號の塲員は鴨或は兎を獵した。

翌朝ポークフォークを出發して復び陸地に到つて、而して大なるカイルヌを海面より三百來突の高さに築かうと、考へた、此邊を歩るくに氷は滑り又時としては雪の軟き中に落つる事もあつて、其危險は實に名狀すべからざる程であつた、遂に我々は此處にある一番高き絶壁に攀

登る事が出來た、此處より下を望めば風が雪を吹き舞はして其凄き所の景色と云ふものは到底他の地に於て見得べからざる所の光景である。

是より北方の海を眺むれば渺漠として居つて、航海には最も適して居るやうに見える、船に歸つて來ると直ちに出帆して、イザヴェル岬を廻つた處で氷塊に出會した、氷塊は次第々々に其數を增して來てアレルト、デクーヴェルトの二艘は全く此氷塊中に取捲かれて了つた、斯くの如くして殆ど五日間進退する事も出來ず遂に已を得ず停止する事になつた、其氷塊は非常に厚くして到底之を打碎く事が出來ない、詰り暴風が來て我が爲に進路を開いて呉れるを待つより他に途がないのである此邊には更に禽獸を見ない、船員等は頻に地理學上の研究に汲々として居る、此地は一の灣の如き所であつて、我々は此處に一の名を下してベーヤ岬と命名した、ベーヤと云ふのは澳斯太利亞の有名なる探

ナルベルヌイ海

險者の名である、此地に於て我々は始めて櫂を曳く所の技術を練習した、予と考を同うする者が八九人あつて共に此氷の上に於て練習をなし遂に熟練する事になつた、其技術を練習する間の危險と之に伴なふ面白さと云ふものは、或は人をして絶倒せしめ、或は人をして氣絶せしむる事があつて、愉快危險交々到つた、其他此處に於て最も面白き遊びはナルバルと稱する鯨の種類を獵するのである、恁くの如き遊戯の爲に僅かに日の長きを忘れて居た。

四日朝。南風は夜來より吹き荒んでサビーヌ岬に到る海路は總て開けた、此機を失はず出發するに決し、午前四時に錨を揚げ櫓を刺す如き寒風に押されて、此邊の海岸を通り而して西の方に向つた、正午頃に至つて復び氷塊の密なるを見て遂に一の好良なる一小岬に碇泊する事になつた、此處は此邊に於ける最も好良なる景色であつて、我が旅客の心を慰するに適して居る、我々は一時も早く上陸をして其内部を檢し

やうとした、それ故に錨を投ずるや否や直に船より下りて小艇に乘じた其邊は夏期瀑布の多き所と見えて冬期は其瀑布は氷結して居る、故に陸地に上らんとすれば須らく此氷の瀑布を攀ぢ登らなければならない。

此邊の食物は非常に豐富で其他野獸なども多い、我々は不幸にして銃を携へざる爲之を獵する事が出來ず彼等の歩るきたる跡を見て垂涎するのみである、七八吉羅米突を歩行して漸く大なる氷山の傍に到着した、是こそ幾十世紀以來の殘物であるに違ひない、エスキモー人は常に此邊を往來したやうに見受けられる古き小屋などもあるし、其他穴居せる跡なども殘つて居る、我々は不幸にして此地に長く居る事が出來ない直ちに立去る事になつたが、萬一我々の一行をして長く此地に居らしめたならば探險上面白き材料を得たに違ひない。

第六章

翌日歷山港に到着した此間氷塊と鬪ふたる事數度漸くにして此港に到着するを得たが其變化の甚しいには驚くの外はない、然るに復た大氷塊が現はれ來つて其危險なる事殆ど累卵の危きに逼つた、既に我々は此氷塊の爲に微塵に碎かれる事と思つた位である、總ての船員等は櫂其他船體以外に突出せる器具等を甲板上に揚げ成るべく衝突を避けやうとした、然らざれば、船は是が爲に一層激烈なる危害を加へらるるに定つて居る、デクーヴエルト號は我々より尙一層危險の點にある一分毎に我々の運命は危地に近いて來る、非常なる響きをして衝突する、大氷塊あれば又漸く間髮を入れずして之を避けたる大氷塊もある予は甲板上に立ち唯だ茫然として既往將來を追想して居るのみであつた、此時候にして現はれたるは即ち第二の大氷塊である、アハヤ是が

爲に海中に沈まんとしたるが、幸にして之を免るゝ事を得た。

予は唯だ茫然として種々なる事を考えて居る中に我が朋友は予が荷物を造り萬一の場合に際して船より逃げる用意をして呉れた、漸く危難を免れてより予が荷物を檢すれば、予が荷物中にあるものは、二三の書物と聖書及寫眞其他鰯の罐詰位のものであつた。實に此氷塊中を過ぐる時は一分間たりとも怠る事は出來ない總て眼を海上に曝して詳細に檢査をしなければならない餘り周章狼狽すると空しく石炭などを消費する事がある、檣上に於ける觀察臺の如きは常に船長が望遠鏡を以て此處に座し食事なども此處に於て爲しつゝ夜の目も睡らず注意をなし、或は氷塊の流るゝ流動の方針を考へ、或は潮流の工合を見或は風力の速度を檢しつゝ疲勞も感ぜずして其職務に汲々たるは實に感服の外はない。

翌日朝ビクトリアに到着した、直ちに上陸して此陸地を檢査したが、衝

檣上の觀察

突の危險にして困難なるは氷塊の多い爲であつた、我々は陸地に於て種々の化石などを拾得した、此地は總て氷原であつて僅にエスキモー人の二三の小屋と其他狐の棲穴を見た位である、予をして此處に入るまでの事を觀察せしめたならば、スミス海峽の西岸は隨分人の往來も繁くあつたやうに見受けられる、殊に生魚の肉を食ふ者は無數でありしやうに思はれる、併ながら是等の人民は如何になりしか、是こそ充分に研究する價値がある、或は次第に減滅したるが、或は減滅せずして南方に移轉せしか、大疑問は茲に浮び來つた、今予が檢査した所の頗末を詳細に記るさば、非常に浩瀚なる一冊を作る事が出來るが、茲に筆を擱いて第七章に移る事にしやう

第七章

八月四日。日曜日、朝來雪降りて陸地は總て白毛を置いたる如くなつ

た、午後になつて天は漸く晴れしが海水は凝結して、船を進むるに困難である、僅か百米突の小海峽を過ぐるにも非常に機關力を費した、四時アレルト號は氷塊と小衝突を試みたけれども、幸にして大損害を受けず、進むに隨ひ航路は開けたりしが、是は北風の吹き止んだ爲めである、漸くにして不愉快の地位より船を退け、成るべく進行を速めんと、圖つた。

午前零時、五時間以前よりグリンヲルの地を望みしが未だ到着する能はず、漸くにしてフランクリン、ピエルス灣の大氷山の傍に到着した、此間の進行は非常に速かであつてフレーザー岬は我々の目前に逼つて來た、此岬を過ぐればバッフヰン海に等しく自由なる海を北方に向つて得らるゝと云ふ望みを以て居つた。

既にポラリス號は此機會を得たるゆゑ、我々も此好運に會せざる理由はないと信じて居つた午後に至つて不思議にも氷塊は開け宛も我々

の爲に天候が航路を開いた如き感があつた、デクーヴェルト號は我々に遲れて來たが、此處に於て相會する事が出來た。

九日。朝漸く六七吉羅米突の海路を行きしのみ、氷塊は彌々甚しくして到底船を進むる事が出來ない、夜來の雪は此海水をして半氷らしめ半霜の如く結ばしめて、進行を害する事夥しい是より三日間と云ふものは、殆ど船を進退する事が出來ない。

此地に一の島嶼を發見した、是はノルマンロッキエーと稱する島であつて有名なる天文學者の名を付した島である、我々は此島に上陸して諸所探險を試みたが、纔にエスキモー人が住居せる古き小屋を見出したるのみにして、其他には弓の折が殘つて居つたのみであつた。

大なる三頭の海馬が如何にも奇異なる風をなして此岸に憩んで居るのを見たので、船員等は直ちに之を獵さんとしたが、其手段巧妙にあらざれば彼等を遁走させるに違ひない、故に小艇を艤して之に武器を乘

せ、而して一頭も遁さず是等を捕獲する策を講じたが、彼等に近くは容易な話でない、或時は船を氷塊の上に辷らし、或は軟き氷の中を過ぎなければならない、酷烈なる寒氣なるにも拘らず、船員等は手に汗を握り彼等を驚かさいるやう靜かに進みつゝ、彼等を去る殆ど十米突の所に到着した、幸にして彼等は熟睡して居つた爲己の身邊に一大危險の近いた事を知らない、遂に彼等は目覺めて頭を擡げ如何にも凄き有樣をなし生命を賭して此遁路を得やうと云ふ考を起したやうである。射手は銃を肩より下して、彼等を擊たんとした、一發の銃聲轟くと同時に彼は怒嗥を發して之に答へた、三頭の海馬は水中に其姿を隱したが、彼の沈みたる所は鮮血淋漓として海は血を以て染めて居る、此中の一頭は必ず負傷したに違ひない我々は直ちに船を其傍に進め而して、船に乘りたる者は槍又は斧を持つて用意を怠らない。

此海馬は一度負傷せし以上は猛虎の勢を以て抵抗を試むるものである故に再び水面に浮び來し時に於ては一擊の下に打殺さなければならぬ、船員等は其用意を爲して待つて居る中に、忽ち水は渦を爲して再び此大怪物の現れ出るを示した、之と同時に長き髯毛を以て掩はれた顏に火の如き眼光を瞋らし我々の方に向つて衝き掛らんとした、茲に於て再び一發を放てば彼は倍々猛烈なる勢を以て艇の傍にまで進んだ、併ながら我に敵する能はずして其處に斃れた、之に繩を付けて氷の上に引揚げ皮を剝いで油及肉の或部分を貯へたが是は犬に與へる爲には最も好良なる食餌である。

翌日再び一頭の海馬が現はれた、我々は之を打殺し其肉を以てビフテッキとなして試みたが好味なる事豚よりも遙に勝つて居る。

此氷塊中に擒となつて居る間は船員一同種々なる遊戲を催し時としては笑聲湧くが如く此海中に蠢く事がある、實に此北氷洋に於て進退する事の出來ない時分には成可心を慰むる手段を取らなければなら

ぬのである、英吉利を出立する時分に種々遊戯の道具を携へて來た故に先づ第一に箱より革で造りし蹴鞠を出した是などは最も氷の上に於ける滑稽にして且つ娯樂の要具となつた、又氷滑りなどゝ云ふものは日々の樂みであつて、老若に關せず總て遊戯に耽る事になつた、其他犬を使用して競走などを催した事もある、此犬等は船首に養はれ、監督者を付けて充分に優待して居る性質は優美ではないが、其勇快なる事に於ては、到底此犬に匹敵するものはない、予は一匹の英吉利產の犬を持つて居つたが、是は予が最も愛するものであつて、彼はエスキモーの犬を蛇蝎視して居つて、常に我領分を侵されないやうに自分の範圍内を堅く守つて居つた、此船に一度使用せし以來一種の精神病（一種の恐水病）が起つて殆ど船中の犬を殲滅する程の勢ひであつた、故に之を船より下ろして氷原に放てば、彼は恍惚として水に溺れるもあれば、又渺漠たる氷原の中に跡を暗ますのもある、全癒するもあるし、又立處に死するもある、其中最も激烈なるものは銃殺しなければならぬ。

グリンランド地方に於ては眞正なる恐水病と云ふものはない、縱令是等の犬に嚙まれても決して不幸な結果を起さない、犬が橇を曳いて居る間に、時としては癲癇性の病を起して口に泡を出し、雪の上を輾轉して非常に苦む事がある、然る時には直に之を橇より解き放して置けば彼は數分間にして、跡より逐ひ驅けて來る、茲に於て再び彼れを列に加へて働かすれば以前と同樣に働くのである。

コラン醫伯は此病氣に就て非常に研究をされた、其結果としては恐らく好成蹟にして他日の遠征者には多くの利益を與へるに違ひないと考へる。

橇に用ゆる所の犬は顏より綱を付けて曳かせるのである、一般に六匹十二匹位を付ける、是等の一頭は先づ七十五キロ位のものを運搬する事が出來る、併ながら是は餘り量に過ぎて居るから長時間には堪へな

いが、彼は强健であつて大概の事には疲勞を感じない、それ故に荷物を充分に載せて居れば日に四十吉羅米突か五十吉羅米突位を走るが、一層輕量なる荷物であれば百五十吉羅米突から百六十吉羅米突を二十四時間内に走るといふ話もある天氣が克くして充分に氷つて居る時分には是程愉快なる樂みはない、併ながら霧深き時、或は風の激しき時、雪暴風の時分には殆ど咫尺を辨じない爲に、之に乘ると云ふ事は愉快と云ふよりも寧ろ不愉快の極になつて來る。

凡て一時間に十五吉羅米突の速力を以て走る程氣分の良い事はない、粉の如き雪は顏を打つて隨分冷かであるが、犬は此間を一散に驅け走るを悅ぶ如き有樣である、騎手は橇の上に居つて犬の頭上より危險を避けて行くやうに之を馭さなければならない、萬一氣付かない時分には此犬等が歩を止め妙な眼付を以て其主人に注意する、騎手は之を知らずして鞭つと雖ども彼は頑として動かない、彼は死に至るまでも進む事を肯じないのである、鞭は此犬群を馭すに最も必要なものである、其鞭は五米突より六米突の長さの海豚の革を殆ど三十サンチメートルばかりの木に縛り付けたるものである、是は熟練せる者の爲には非常な利器となる、餘り重き物を曳かせる場合には非常に多き食料を要する故に急を要せざる時は成るべく使はぬやうにして居つた、最も急を要する時分に之を使用するに其速き事宛も疾風の如く、此點に於ては缺く可らざる動物となつて居つた。

第八章

八月十二日。未明よりして海路は開けた故に我々は進行を試みた、併ながら凝結は甚しい、如斯遲延するは實に我々の心を痛ましむるのである、既に最後の氷を衝いて出でんとして費したる石炭の量は夥しい、それのみならず、食料なども非常な勢を以て減じ又航海に適する氣候

なども最早末となつて來る、新たに凝結する氷は其厚さ三サンチメートルに及んだ。

凡そ北氷洋に來るものは愼重と云ふものよりも寧ろ忍耐を尊ぶ併ながら機會を失はずして機一髪の間に進退を決し、充分注意を怠らず危險を避けなければならぬ。

此日正午頃に至つて船の周圍は再び氷結して了つた、併ながらアレルト號は幸にして其氷結を避けたが、デクーヴエルト號は其燒點に居つた爲不幸にして氷の爲に圍繞された、午後凍結は東方に向つて彌々激しくなる模樣である、茲に於てアレルト、デクーヴエルトの二船は薄氷を碎きつゝ漸くにして自由の所に到着する事が出來た、午後九時我々はドツバン灣の南なるホーク呷に到着した、此處の景色は如何にもヂブラルタルの海峽に彷彿として居る。

此夜は澄み渡りたる好夜にしてアレルト及デクーヴエルトの二號は

徐ろに煙を吐きつゝ此海岸を進んだが、此夜初めて充分なる天文上の觀察をする事が出來た、深更の太陽は尙未だ光りを收めずして近傍の氷山と相映じて絶景筆にすべからず、縱令伊太利の如き絶景の中に於ける太陽も如斯景色は決して呈さないと信する、船を一氷山の傍に着けて此處に食物庫の建築に着手した、船員の一部分は此建築に奔走する間に我々は華盛頓アービングと稱する隣島に上陸した、上陸すると同時に我々の非常に驚いた事がある、即ち此處にセルト人の造れる小丘がある、是はエスキモー人の作ではない、餘程以前に此地に遠征した者が此地の紀念として如斯ものを立つたに違ひない、如何なる書物を見ても此事を記して居らぬ爲、遂に今日まで此紀念物をして徒らに幾百年の久しき間、人に知られずに居つたに相違ない、之を壞したならば我々の探險上何か必要なものを得らるゝに違ひなひと考へて頻りに發堀して見たが、遂に僅かな物を得たのみであつて別に得る物はな

かつた。

漸く其倉庫は出來て、再び進行し初めた、是から先きは爆裂彈の力を借りて、進路を開かなければならない、此氷上に新しき熊の足跡を見た、是がメルヴヰル灣に於て熊を逃してより第二番目の熊であるが船員等は徒らに手を撫して、之を獲られざるを歎じた、午後に至つて船の安全を圖るが爲、此海中の最も安全なる所に一の船渠を造らなければならない、命令を下してより四時間の後に成効して、此處に船を入れる事が出來た、是等は最も非常な事であつて、命令を傳えらるゝと同時に機械を揃へて船員一同氷の上に降つた、其景色の壯絶なる實に愉快である、此處に鋸を置いて而して船渠の廣さを測り、各々其職業に取掛つた、唯だ船には僅に周番士官と機關師及測量師が殘つて居るのみで、他は總て此事に從事した、時々氷を爆發せしむる音は非常な響きをなして、厚き氷を瞬間に打碎いて了つた、是が此工事をする第一番の難工事であつた、幾干の時間を以て成効するなどゝ云ふ比例は取れぬが、其成効の速なるは船員一同の働きの激しきに依つて知る事が出來る。

船に歸つて四時間の勞を慰せんとするに、火などは一も焚いてない爲に濡れたる衣を乾す事も出來ないのみならず、又暖き茶を飲む事も出來ない、此日は犬の食料を減じたが爲に悲聲を揚げて泣き叫ぶ聲は物凄く感じられる如斯して二日間を經過したが、八月十五日の朝に至つて此海峽の間に大きな自由の所が出來たのを見た、此日は日曜日であるから船員を休ましめんと云ふ考であつたが、最早一刻も猶豫する事は出來ないのみならず、航海する時は近いて居る事であるから、どうしても此機會を以て進まなければならない、船員の大部分は殆ど晝夜も睡らずして氷を碎く事に從事した、其間殆ど九時間或は爆裂彈の力を借り或は人力を以て之を碎いて進んだが、其爆發力は殆ど八水雷の力があつた位である。

此爆裂彈の力は今云ふ通り實に非常なる好結果を呈した、之を以て一の立派なる運河が出來た、茲に於て船渠より船を下ろして進み、ルィナポレオン岬に到着した、併ながら三時間ばかりの後に船は到底通行すべからざる所に這入つた、氷の厚きも四米突より六米突に及んで居る、此度は鋸を以て開鑿する事能はざるのみならず爆發藥も其効を奏さない位である、氷の高さは船よりも高くして甲板より直に氷山の上に脚を付ける事が出來る位である、如斯して三日間を過したが實に我々は煩悶に堪えなかつた、若も他の氷塊が來て之に衝突したならば眞に危き運命に逼るのである、此時に於て唯だ我々をして慰ましめるものはヘース岬を散歩する位のもので、北方を見れば見渡す限り氷塊のみである。

此一日間に二度程大危險に逼つた、大氷塊は此近傍に於て破壞したものと見え非常なる響きをして其破片は船より遠からざる所に積重つ

た、此時に於て船員一同の働きと云ふものは恐ろしい程であつて、生命を賭して勞働し、如何なる仕事をするにも非常の熱心を以てやつた爲に總ての仕事は立處に整理して仕舞ふやうになつた。

十九日。氷塊は多少其數を減じた我々は欣喜雀躍してフレーザー岬を過ぎた、三週間以來我々は北方に向つて百六十五吉羅米突ばかり進んだのみである、此憐なる結果は我々が如何なる勞働如何なる苦心を爲したと云ふ事を知らるゝであらうと考える、午前十時モーリー灣と稱する一小港に船を止めなければならぬ、茲に於てベッセル博士のポラリス港に於て觀察したる點の正確なるを知る事が出來た、それはグリンランドは一の島であると云ふ事であつた、ジャンバロー岬の頂上より海上を眺むれば北の方には一の航路があるやうに見受けられる、又東の方にはコンスチユチユーション岬を見る。

二十日。ノートンショーカ岬を過ぎ、遠征隊の冬籠に最も適したる一

大港スコルスビー灣に到着した、此地には禽獸は多いに違ひない、北方に當つては一の小丘屹立して一灣を形くつて居るやうに見える、マック、クリントック岬に於ては非常に進む事が出來た。

二十一日。北方に向つて航路の開けたるやうに見えたるゆゑ、早朝より出立したが、二三時間の後に我々は目的を達せず元の所に引戻すやうになつたが、船長は非常なる決心を以て方向を東に轉じ午後九時に至つて漸く此困難を排して自由なる所に出る事を得た、是より北に進むに隨つて氷は厚く、其數を增し、動物の棲息は少なく、禽鳥は其數を減じて仕舞つた、唯だ僅に海豚が水中より頭を上げ奇異なる面をなして我々を見るのみである、併ながら一擊の下に捕獲せられて犬の食料に供される。

第九章

二十二日。日曜日天候の變化の甚しきは驚くの外はない、數時間前まで前後左右より壓迫する氷塊に封鎖されて居つたが、今は帆及蒸滊の力を借りて渺茫たる海中を航して居るが唯だ僅に二三の氷塊が浮び來る位のものであつた、我が大目的の茲に初めて成就せられんとしつつあるを信じた、皚々たる氷山はケンシー海峽の西方に漂ひつゝあるけれども、我が目前の東方には自由なる海が北風に波を起して宛も大洋の如く廣がつて居るのみである、不幸にして此風が強過ぎる爲に、蒸滊を非常に焚かなければならない併ながら此風は氷塊を吹き拂つて我々の道を開いて呉れるのは最も好都合であつた、零點以下三度及四度の氣候に於ての此北風は最も不愉快に又最も酷烈である、檣上なる觀察臺の如きは不自由も甚しく之に攀るのは一の苦みであるけれども亦た心を休ませる爲には一の好良なる場所である、此海峽の東海岸を過ぎてクロッエー島に進んだ、コンスチュ、チューション岬は我々の

眼前に聳えて居るが、此絶壁は曾てカーヌ氏がラフワイエット灣と呼びたる所まで延長して居る、此邊には餘り氷塊を見ない、ラフワイエットの南方を圍繞せる山頂の後に蒼白き雲が現はれた、併し是は確然としたるものではない。

此邊の海岸は一般に規則正しくして彼のポラリス號のベッセル博士が指示したる緯度に位して居る、此海峽の海岸の地圖は誤謬が多いやうであるが、此方の岸の方は餘り誤りがない、彼の向岸にあると云ふカルヽリッテル灣の如きは認めない、唯だ我々が見た所のものはリチャード灣のみである、此灣はヘース博士が他の名を付けたのであらうと考へる。

ケンジ海峽の岸の方に於ける地は殆ど雪を以て埋められて居るけれども他の海岸には一向其趣きがない、是程接近して居る所であつて動植物上に於ても非常な差違があると云ふ事を充分に認められる、東の

方は高丘を形くつて其高さは四百米突もあつて其間に谿谷もあるやうに見受けられる、而して一般に地勢が規則正しい、然るに西方に往くと滑稽的の風景であつて或時は千二百米突に上る高さの所などがある、其傾斜なども十度より四十五度位に偏して居る、東方は次第々々に發達したやうに見えるが、西の方は一時に發達したやうに見受けられる。

二十三日。月曜日二十四時間の間、實に愉快の航海をなした、且つ風なども穏かであつて、我々は既に目的地の最終天まで來て居ると云つて宜しい、ベッセー灣を過ぎた後とで我が强敵を再び見るが爲にノートン岬の方に到着した、果して此處には凍氷甚しくして通行する道がない。

ポラリス灣は極く接近せる所にあつて亞米利加人の冬籠りをしたる場所を見る事は容易いやうである、然るに氷塊は累々として其地に近

くことが出來ない、併し南より吹く風は平暖にして數日を出でざる間に此氷も影を隱すだらうと云ふ考を持つて居つた、デクーヴエルト號はノートン岬に於て、他日此ビーターマンの地を觀察するが爲、支隊を派遣しやうと云ふ準備として、充分の食料を小船に積んで上陸せしめた、それが濟んでアレルト及デクーウエルト號はベッセル灣に歸つて來てハンナー島の蔭に碇泊した。

ベッセル灣は細く長き港であつて、所々氷塊を以て掩はれて居る、此處よりグリンランドの地を望む事が出來た、今日初めて鴨及一頭の海豚其他鴨等を認めた、フエール及バルル大尉は灣の北に行き、是より上陸して高き地に登つて南方の海を檢査しやうとした、果して氷のみであつて他に見るものはなかつたと云ふ事である、我々が考へる所で見るとバッサンドホールの西海岸はユニオン岬を以て最終點とする、それより以北には連續して居らぬ、亞米利加の地圖とは全く反對である、今

夜船長及予はハンナ島探險を試みた、此處には紀念の爲に土を堀つて通例の紀念物を埋めて置いた、此高い所より見れば、西方はリーベル岬に至るまで自由に交通する事が出來る、我々は此地勢を利して船を進めやうと云ふ考を起した。

二十四日。船長はノートン岬に聳ゆる六百米突の丘に登らん爲め早朝より出發された、而して前途の見込を豫め付けやうと云ふ考であつた此處で網を打つて魚を獵したが好結果を得ない、此處には氷塊が漂ふて居る爲に、動物が此水中に繁殖する事が出來ないものと見える、併し海岸は石灰質であつて、化石などが多い故に我々は澤山如斯ものを拾ふ事が出來た。

正午船長の乘船して往つた船はノートン岬より直ちに來れと云ふ命令を出された、此命令あつたが爲に我々は其地に驅け付けた所、船長は非常に吉報を與へられた、即ち此絶壁懸崖の上より西方を眺むるに好

頁なる海路があつて是はピーシー岬まで續いて居るやうに見受けられる、茲に於て我々は手の舞足の蹈所を知らざる位に悅んだ。

蓄積せる石炭は日々に減じて最早長航海に堪えない位である、併し此地に於て石炭を焚かずして航海するなぞゝ云ふ事は、到底出來得べからざる話である。

午後十時船は倍々進み、ピーシー岬に到着するには間もなくなつて來た右舷よりは遙にブレブール、サムナー、スタントンなどの山を望む事が出來た。

ベール岬を過ぎた、此處に亦た大氷塊が漂ふて居つたけれども、我々は之に打勝つて進む事が出來た、而してレデーフランクリン港を過ぎベルロー岬の方に進んだ、此邊は果して海峽であるか灣であるかも殆ど分らぬ位である。

二十五日。水曜日午前一時レデーフランクリンの北海岸に沿ひ浪を

蹴立つて徐ろに進んで往く間に、我々は餘り遠からざる丘の上に食物を漁つて居るブッフミュスクー即ち麝香牛の群を認めた、好獲者は直ちに銃を取つて支度をした、此間船は進航を止めて麗しき港に碇泊した此處にて船を下りて直ちに此獸を追驅け初めた。

我々は隊を三つに分ち全軍を擧げ鏖殺せんとして進んだ、意氣昂然として禁ずる能はず、殊に食膳に好味の皿を加へることが出來るを以て、其悅びと云ふものは實に名狀すべからざる程である。

此船が滊笛を鳴らした時に是等の牛は非常な速力を以て遁げ初めた、遁ぐるを追ふて二發、發砲したが果して二頭を斃す事が出來た他の獵者は尙ほ遁ぐるを追ふて進んだ、而して一發の下に此中の王とも云ふべき大牛を斃した、我々は大勝利を得たゆゑに此捕獲品を船に持歸つて之を屠り料理を初めたが、一種の麝香的香があつて、之を食膳に上ける前に於て既に我々は亜涎三尺に及んだ、其肉の量は六十斤以上に上

つた、此獸は博物學上(Ovibos. Moschatus)と稱して、最も高き緯度の地でなければ認めないと云ふ事である、或遠征隊はメルヴヰル島の邊で此麝香牛を非常に斃したと云ふ事を記してある、此牛は此邊に於て最も尊ぶものであつて、ポラリス號の如きは此地に滯在中、即ち十二箇月の間に二十六頭を獲たと云ふ彼等は一般に大きな群をしない、時としては一頭位で居る事がある、然るに我々の斃したる群に於ては一大牛と四の牝牛と二つの小牡牛、二つの小牝牛が居つた、是等は氷の下に生ずる笹の如きものを食料とし、又は草を以て食料として居る、性質は極く遲鈍であるけれども、非常に健康であつて岩石を攀ぢる事は強い、彼は負傷すると抵抗するを以て甚だ危險である、角は大きくして頭の中央より生へて居る之に向つては如何なる砲丸も射通すことは出來ない、此の大牛は我々の得たるものであるが百六十五斤の肉を得る事が出來た。

我々が今碇泊したる港は冬籠りをするは最も適當の場所である、ナール船長は此處にデクーヴェルト號を殘す事に決定した、此港は最も安全なる港であつて餘り深くない爲に大氷塊は流れて來ない、加之此邊の土地には我々が長く見ざる所の植木が繁茂して居る、それのみならず牛は居るし、又狼其他狐、兎などが居る、デクーヴェルト號をして、此處に滯在させる事は最も適當の處置であらうと思ふ。

殊に航海に適する期節は最終になつて來て最早是より數日の中には如何なる力を盡しても到底進む事は出來なくなるのである、此の週間に於ては氣候は先づ零度以上には昇らない、日中と雖も海水は非常な勢ひを以て凝結する、其處で一艘の船であるならば反つて早く進む事が出來るかも知れない、若も萬一の事があつた時分には、他の一艘が此處に居るから其處まで遁れて來る便誼もあるといふので、總て準備を整へて彌々デクーヴェルト號と訣別する事になつた。それ故に夜は

互に往復して無事を祈り、デクーヴェルト號よりは特に七人の水夫とローソン少尉とを此船に乘せて或場合に於ての通信の役目をさせるやうな事にした、アレルト號よりはデクーヴェルトに贈るに我々の獵したる肉を以てした。

如斯してアレルト號は蒸氣を焚き、二十六日朝、此處を出發した、互々に萬歲の聲裡に袂を別ち、而して再會を期した、吁々我々は是より如何なる地に進むのであるか、如何なる困難に出會ふのであるか、天若しも我々をして好運ならしめば、此デクーヴェルト號と再び此處に相會して是等の乘組員と手を握る事が出來るに相違ない。

第十章

今やアレルト號はデクーヴェルト號を殘して遠く北極を探險する事になつたが、唯だ運命を天に任かして我等の成効を祈るのみである、而して四吉羅米突も進航したと思ふ頃より氷塊は數を增して前途を塞いで了つた故に餘儀なく此ヤスカヴェリー灣に船を止めなければならない、予は二三の船員と共に上陸してローブソン海峽の氷塊を觀察したが到底望みを囑されない、グリンランドの岸は皚々たる大氷塊が聳え唯だ細き青色せる水が此間を流れて居るのみである。

此處の小島に於て海燕の巢を認めたが、其中には卵と雛燕の數羽居るのを見た、其他Canutsを得た、此近邊は氷が平らに凝結したるが爲氷辷りには最も適して居る、翌日も倘船を動す事が出來ない、雪は芬々として降り初めた、それがため此氷塊の流れ工合を充分に檢査する事が出來ない、如斯して滯留も次第に長引く爲に食料品の如きも殘餘が少なくなつて來るし、又氣候も非常に激烈になつて來る、故に薪炭なども充分に費消しなければならぬ、併しながら此近邊の島には流木などあるを以て、之を拾つて薪炭に代へる事にした。

今我々が碇泊して居る島の名はベルロ島と云ふ名であつて、是は佛蘭西の或若き士官がフランクリンと其朋友を尋ねんが爲、此處に來つて、勇敢なる死を遂げた爲に此名を付けたのである。

二十八日。土曜日、朝來より霧深くして船を動かす事が出來ない、正午頃に至つて漸く霧も霽れ又ビーシー灣の方に向つて、航路も開けたやうに見える、此機を外さず機關に火を焚いて進まんとするに、船底が凝結したるものと見えて容易に動く事が出來ない、漸く午後五時に至つて進航するやうになつた、此處に於て旗を檣頭に掲げデクーヴエルト號に向つて最後の袂別をなした、デクーヴエルト號は我船に向つて「冀くは健在にして早く歸り來れ」と云ふ信號をなして我等の前途を祝して呉れた。

ジスクン岬を過ぎて海は凝結して居るけれども其中に細流を見た併し餘程の注意を以て此處を進航しなければならない

午前零時ビーシー岬の近傍に於て、再び氷塊は甚しくなつた、之と鬪へば敗北を取る事は判り切つて居るゆゑに、船を止めなければならない、然るに此邊には船を碇泊せしむる所がない、餘儀なく船を後方に轉じて午後三時頃に至つて港らしき所に着く事が出來た、此陸上に麝香牛の居るを認めた、茲に於てか獵手は銃を取つて、其三疋を殺した、此境涯になると新鮮なる肉は倍々尊くなる、我々が今碇泊したる所の港はシフトルーデル灣と稱する所である。

翌朝船長は高丘に昇つて此邊の地勢を檢査されたが、然るにビーシー岬の邊は自由に航海が出來るやうに見えるけれども、それより先きは氷塊甚しく到底進航する事は出來ない、殊に今此船の方に向つて、一の大きなる氷塊が流れ來つて將に衝突せんとする勢ひである、二分間ばかりの事で、之を避けたが、此氷塊は絶壁の下に行つて激烈なる衝突をなし、宛も百雷の落つる如き響きをなして破壞し其破片は空に飛んで壯

快の狀を現はした、若も此氷塊が我船に衝突したならば船は微塵に成つたに違ひない。

此邊の氷は今まで予が見た所のものとは殆ど性質を異にして居る、厚さの如きも數倍にして大きさも亦た數倍である、其高さは殆ど二十五米突より三十米突に至る。

此夜十二時頃になつて再び大氷塊が現はれて來たが、幸に之を避けることが出來た、此邊の地圖は亞米利加の地圖に書いてあるものとは、全然異つて居る。

此地の動物は lemming と一の黑き guillemot, 位に過ぎない、此處で小さな首環を掛けて居る如き斑紋を首に現はして居る鼠を捕へたが、是は船中の玩弄物となつて喝采を博した、此鼠は我々が歐羅巴で見る所の鼠と違はないが形は小である、併此邊には非常に數多い、是等は夏の間は極く僅かな食物に滿足して居る、レンミングは更に人を恐れずして、能く人の傍までやつて來る、燒麵包を付けて、之を燒肉として喰べるには鼠が適當して居る、此處を去る事二吉羅米突ばかりの所で博物學者は海貝を拾つた、此邊は博物學者の材料を蒐集するには最も適當して居るやうに思はれる

三十日。月曜日、此邊の山に貯藏庫を拵へて後日南方より來る船の爲に用意をして遣つた、其中に氷が裂けて一帶の水路が現はれて來た此機を外さず進んだならば、遂には我々の望む所の終局點まで達する事が出來るかも知れない、直ちに蒸氣を用意し彌々進航する事になつた、然るに船を出すと間もなく、大氷塊は現はれて進路を塞いで了つた。

此夜は船員一同戰々兢々として睡る事も出來ない、最早運命を天に任かし船長の命令に依つて此船を見捨てると云ふ場合に逼つた、翌日極く微力なる蒸氣を焚いて試みた所幸に氷を碎きつゝ進む事が出來た、而してリゾコルン灣の方に進んで僅に千八百米突の所に到着するに

氷海中に籠れるアルノルト號

五時間を費した。

此日非常に強き西南の風が起つて來て、其危險は尙一層其度を增した、午前零時頃雪は加はり空色は惡く雨模樣を呈した、我々は此風の爲に海峽の氷が吹去られるであらうかと云ふ事に望みを囑するのみである。

九月一日。水曜日、此日は最も紀念すべき日である、即ち我船は今まで人の來る能はざりし所の最後の島に達した、正午頃我が船員は互に手を握つて成効を祝した、斯く速に最後島まで達したと云ふものは、夜來は西南の風の爲に氷は反對の方に吹き送られて、此海上に一條の水路が出來たのを辿つて來たからである。

一時間十ノットの力を出して、而して北の方に歸つて來た、水路も廣き所に於ては五吉羅米突以上の幅になつて來た、茲に於てか船員の悅びは實に名狀すべからざる程である、我々は今年中には到底最後島には

達せられないと云ふ考であつた、然るに今耳を欹つて檣上の望樓より叫ぶ聲を聞れば前途は水滿々として氷は更らにないと云ふことである。

茲に於てか我々は大きな机を取圍んでマデールを飲み互に其好運を祝し合つた、併ながら雪は芬々として降り來り殆ど海岸を見ることが出來ない、漸くにして船は東北に進んで居る事が分つた、此邊は渺茫たる海であつて灣もなければ港もなし、船を碇泊するやうな所がない。

ユニヲン岬の北に於ては陸地が西北の方に見える、今まで吹いて居つた風も吹き止んで仕舞つた、一時は風の爲に運を開いたが、風が吹き止んでより氷塊は再び殖えて來る、餘儀なく船を二吉羅米突程歸して港らしき所へ止らなければならぬやうになつた、此邊こそ極洋であつて、氷は深く海底まで凝結し到底進む事は出來ない、唯だ南風が吹き荒んで氷が融解するやうになつたならば我々の望みも多少達せらるゝ事

になる、如斯場合になつては、最早運を天に任かすより仕方がない、唯だ是から先きは神の力に依るのみであると云ふ事を覺悟した。

第十一章

最も緊急なる事業は、船の安全を計る策である、船員は擧つて此氷を打碎くことに熱中して居る、而してアレルト號を今少し前方に進め氷塊の衝突を避け得る最も安全なる所に碇泊せしめやうとした、此事業や非常に難くして風は恐るべき力を以て吹き荒んで居る、殊に氣候は零度以下十度より六度以下になつた。

總ての事業が成就しない中に霰は降り荒み殆ど今までの事業を水泡に屬せしむるやうな工合である、寒氣激烈になつて來た爲に暖爐を焚いたが、成は風の工合に依つて北進する事が出來るかも知れぬと思つて居つた、然るに忽ちにして風は反對の方向に吹き總ての氷塊は陸地

に向つて流れ來り、其危險は一層烈しくなつて來た、茲に至つて策の施すべき途がない、南に遁れんか、到底遁路を得る事は出來ない、然らざれば蒸氣力を以て此氷を碎いて進まんか、實に危險千萬な話である如斯場合になつては、船を氷の中に入れて、而して氷を以て氷を防がせるより途がない、最早一分間も猶豫する事は出來ない、茲に於て船を綾らして安全なる氷の中に遁げ込んだ、實に如斯所に冬籠りをすると云ふ事は到底出來得べからざる話である。

此處には港もなし灣もなし、若も風の方向に依つて其邊の氷塊が碎けたならば、我船も同時に碎けるのである、併ながら他に良港を見出さない爲に、暫く此處に冬籠りをする決心をしなければならないやうになつた、追々寒さも激烈になつて來るし、寒暖計は倍々降つて了ふ、遂に北極洋の氷中に此身此船を曝さなければならないやうになつた。

四邊の光景は純然たる冬の景色となつて來た、而してアレルト號は雪

或は氷を以て其船躰を取卷れて了つた、其深々として更に聲なき有樣と云ふものは、我々をして身の毛を竦立たしめる、一の動物もなく、又活きて居るものは一つもない、其淋しき有樣は宛も墓場の淋しきと同樣である、今までは市中の車馬の音などを耳蒼蠅く感じたが又如斯悽愴たる有樣は彼の市中の有樣を想ひ出さしめる、夜と云ふものも殆ど知らなかつたが、段々に日一日と闇くなつて來る。

九月三十日。午前零時太陽が隱れて以來、次第に日光を見る事少なくして晝間尙星を見るやうな事になつて來た、此傍に高い所がある、之に登ると此邊の有樣は能く分る、之より少し先きにジョゼヘンリーと云ふ所がある、我々は今日より八九箇月の間と云ふものは最早進退することが出來ない、併し我々の事業と云ふものは今日より益々重くなつて來るのである、彌々此處に碇泊して八箇月の日月を越すと云ふ事になつては、今一度力を盡して氷と最後の鬪ひをして見なければならぬ

氷塊の渉

と云ふ考であつた。

五日。早朝オルドリッヒ大尉及予は八頭の犬を率ひ、一は丁抹人ピーターソンが馭手となり一はエスキモー人フレデリックが馭手となりて橇を以て此邊の海岸を探險せん爲船を下りた、此邊は平坦でない、所々に高き丘などがある、其高さは六十五米突より八十米突に及ぶ時があるから橇より降りて登らなければならない、而して西方に向つて進んだ、實に此橇の走る心持と云ふものは一種の妙味がある、殊に人跡絶えたる此幽境殊に雪野に走るのであるから其趣きは無論他のものとは異つて居る、正午頃になつて來ると寒さの爲に食慾を感ずるけれども勇氣を鼓して進み、僅に持來れるブランデーを飲んで神經を鼓するのみであつた。

エスキモーの犬と云ふものは非常に能く驅ける、併ながら止る時分には始終睡つて居る、之に僅かな肉を遣るとそれを喰つて滿足して居る、

ビスケットの如きものは決して喰べないけれども彼等は常に餓えて居る、我々は櫂を止めて暫時休憩した後に再び出發した、雪は以前に倍する事幾倍、時々櫂より降りて此邊の海岸を望むと十二匹の鴨が泳いで居つた、我々を見て非常に驚いたやうであるが急に逃げもしない、此處で五匹を斃す事が出來た。

然るに此鳥は我々を隔つる事非常に遠い水中に居る爲に取る事が出來ない、餘儀なく茫然として此處を立去つたが翌週になつて、予は之を拾ひ取る事が出來た、其時は氷が張詰めて居つて容易に手に取る事が出來た、それのみならず此の邊にはレンミングなどの居た形跡を認めた。

茲に至つて我々はアレルト號を安全なる所に置かなければならぬ依つて凍氷の薄き日を利用して豫防策を講じた。

此邊の海岸は最も愉快である、而して隨分鳥獸も多いやうに見受けられるので船員の二三は獵をするが爲に出發した。

十一日。予も亦た船を出て此邊を探險した。

十五日。非常に風が起つて、我々は船に歸らうと云ふ道であつたが危くも一命を拾てる所であつた、唯だ驚いたのは、此數日間の非常なる働きにも屈せずして、日に十八時間休まず歩行して、遂にアレルト號に歸つて來た水夫の勇氣である、船に居つた者等は此天候を見て實に如何なる事に成行くかを非常に案じて居つた、翌日に至つて漸く風は止み氷も融解した所あるを以て、船長は最後の決心をなし進航を命令した機關手は蒸滊に火を入れ、出發せんとしたるに、再び暴風雨は起つて船は、進む事が出來ない、實に我々は牢獄に虜になつて居るも同樣であつた。

二十五日。櫂に依つて此邊を歩るく者もあれば冬籠りをする爲の準備に汲々として居る者もあつて終日繁忙を極めて居つた。

第十二章

既に述べたる如く橇の旅行と云ふものは、初めの中は實に愉快極まるものであるけれども、渺茫たる氷野を渡るのみで變化もない爲に自然之に飽くと云ふやうな傾がある、橇に乘つて或點まで行き橇より降り而して火を焚いて鮭其他此邊で取れる所の魚などを炙りなどして、飢を凌くが是等は亦た一種云ふべからざる興味がある、併し如斯土地に來ては倍々食物などに心を用ゐて出來得べき丈節減をしなければならない、縱令非常に飢を感じた所が其規則的の所まで來る以上は一粒の米一滴の水さへも飲む事は出來ない。

橇を以て二三晝夜の旅行をする時は夜間天幕を張るが、是等は成るべく輕き材料を以て拵へるのであつて纔に北風の嚴なるを避けるに止つて居る、夜深更に及ぶに隨つて殆ど手なども凝結するやうな心地がする、さう云ふ時分には僅かなブランデーを飲んで暖氣を取る、天幕内に於て、火を焚く事は出來ず、又外に於ては尙更出來ない話であるから、暖を取るのは隨分難事である。

前にも云ふ通り此邊は追々夜が長くなつて來て最早旅行なども次第に出來なくなつて來る、偶々橇に乘つて上陸しても總て持ち來りし物は氷つて了つて喰べる事が出來ない、其不愉快其凄然たる有樣は實に旅情を動かす事甚しい。

二十七日。朝八時予を初として予の船友等は食庫の監督長の深切なる注意に依つて、非常に好味なる朝飯を喫する事が出來た、八時十五分頃深く此地を探險せん爲橇に乘つて出發した、此日は殆ど二十五吉羅米突を旅行し、其處に於て一夜を明す事になつた、天幕は氷つて實に寒氣は骨髓に徹して居る、翌日は青色せる氷上を二十二吉羅米突走つた、其進行の速かなる殆ど橇の上に居られない位である。

海豹

三日目は氷野に凹凸甚しき爲橇を走らすことが出來ない、或場合には我々共が自ら橇を荷はなければならぬやうな事がある、殊に雪は非常に降り來つて船に歸るまでの間降り續いて了つた、偶々休憩などする時分には旅中の苦を忘れて笑聲なども起るけれども、何となく悄然として居る、何時も旅行中の話は食物及び飲料此二つよりない、夢にさへ食物の事を見ると見えて、或日の事水夫は大聲を發して言ふに昨晩フロンミブヂンクを喰べました、などゝ突飛なる話を仕掛けるやうな事がある。

十月四日。最早食物も段々盡きて來る、餘儀なく戻らなければならぬ此間に食料品を貯へる所を造つて置いたが、我々はジョゼフヘンリー岬に到着しやうと云ふ考を以て發程した、併し霧深くして到底此地を見る事が出來ない、殊に氷塊は限なく張りつめて居る。

九日。寒さは彌々激しくなつて來た爲めに總ての物は凝結して了つ

た、太陽の如きは、午後一時に沒して了ふが、明方の光りと一緒に現はれる。

十四日。　進行は一層遲い、七日目にして漸く船の形が見えて來た、我々が歸り來るを見て、船員等は我々を迎ひに來たが、如斯旅行をして我が愛する船に歸つた時の心持と云ふものは、實に筆紙に盡されない、我々が出立して以來、船友等は總て我々の健康を心配して居つた、殊に雪は降り道は彌々悪るくなつたのみならず二十日間の食料ほか持つて往かぬ爲、如何なる事に立到るかを心配されたと云ふ話であつた。

今日は我がアレルト號の大なる室に居つて、洋燈には火を點じ煖爐は焚いてあつて、白き手巾は机の上に飾られ、マデール、ボルトーの壜は其處に並べてある。

讀者は是等の有樣を見て左程驕つて居ると思はれまいが、此旅客等に對しては如何に愉快に感ぜしか、我々は三週間以來殆ど光などを見な

い又好良なる食物を喰べない、又暖き湯などに浴した事もない、然るに今日は總て其愉快を取る事が出來た、我々の旅行の結果は隨分面白い事があるが、先づ特書すべきものは、此アレルト號が碇泊したる所より七十五吉羅米突の所に大なる食物庫を造つた事である來年は是非共此所を通つて、其食物を得なければならない、我々の過ぎた所は彼のエドワードバリーより高き點まで達したのである、我々は今一層遠き所まで進まんとしたるに太陽が隱れた爲に、其目的を達する事が出來なかつた、橇の經驗は之を以て充分に研究する事を得た、追々寒くはなつて來るし、只だ一陽來復の春の來るを待つのみである。

第十三章

船員は總て船に戻り來つて、冬籠りの用意に取掛るより策はない、十一日以來太陽は現はれずして日中僅に五六時間曉方の如き有樣をなす、

のみである、各々は其日々々の最も必要なる仕事に取掛つて居つて、體を休める暇もない、氷は倍々厚くなり、如何なる危險に遇ふも最早之を遁れ得べき策は盡きたのである、萬一破壞等の運命に差迫つた時分には食料の點に差問へるが故に豫め之を用意せんとして種々なる器具及食料品の大部分を陸上に運び而して此處に食庫を建てる事にした、其庫は廣くして萬一危險に際した場合には船員一同が遁れ得る事の出來るやうにしたのである。

其處には繩其他橇等總て備つて居る、此外尙藏の傍に小かなる小屋を無數に造つた、又天文臺の如きも此處に造つて小グリーンウヰッチと云ふ名を付た、總て冬の用意に就ては充分に整つたのである。

磁針器の試驗などに就ては予及ジュファールの二人が擔當員となつて頻りに之を研究した、又火藥の如きは船中に火を燃すが爲に危險であるから、之も陸上に荷揚をする事になつた、それゆゑに此邊の淋しき

有樣も次第に賑かになつて、一の新殖民地が出來たやうな觀梅である、隨つて人氣も自然引立ち面白可笑しく其日を送る事が出來る。

十月二十六日。　船體は總て氷を以て蔽はれて了つた、陸地には甲板より二つの道を造つて、一方は出入に充て、一方は掃除其他運搬等の用に充てる事にしてある、一週間に二三度位つゝ氷などを此所より運ぶのである、此近傍の雪は一般に軟いが此處を去る小距離の所にある氷は硬くして物に堪ゆる力がある、此最も堅き所の雪を以て高さ一米突二十二の巨壁を拵へて而して種々なる危害を避けるやうにした、甲板上に於ける總ての機械と云ふものは取外された

甲板上の雪の厚さは殆ど三十サンチメートルである、檣上なる望樓の如きも雪に蔽はれて纜に出入の口があるのみである、飲料水の如きは凝結を防がん爲充分に豫防してあるが時に依つては雪などを溶して飲料水に代へる事がある、寒暖計の如きは零度以下十五六度に降つて、

到底革の靴などを穿く事は出來ない、此寒さになると革の如きは凍結して殆ど彈力を失ふ、加之之に觸るゝと凍傷を受け易い、故に膝まで蔽ふ毛の靴足袋などが最も必要を感じて來る、士官を初として水兵に至るまで、毛革を着ざる者はない。

冬になつて水は凝結する爲に一朝火災等のあつた時には之を鎭滅することが出來ない、それ故に其用意も充分整て居る。

此地に於て最も研究すべきものは氣象である我々は終始之に注意して其變化の有樣を巨細に帳簿に記入した、氣象を測る機械と云ふものは到る處に備付けられてあつて、充分に觀察が出來るやうになつて居る。

第十四章

彼のエドワードバリー氏が北極の地方に於て長日月を經過した經驗

に依れば、此地方に於ては、殊に人智を發達せしむる事に就て怠らざるのみならず充分に其快樂を得る事に注意しなければならぬと云ふ事を言はれた夜間は常に夜學校を開いて、士官等が教官となり、又演劇などを仕組んで之を演する事になつて居る、遠征を試みた者は總て如斯事をするのが例である、船が一度氷中に睡つた以上は、自然船の用と云ふものも段々減つて來る。

士官の如きは隨分種々な仕事をするが、理科學上の研究をするし又天文學上の點に於ても充分に取調べなければならない、併ながら水兵に於ては殆どすべき仕事がない、それ故に彼等の旅情を慰めて此變化なき冬期間の鬱を散じさせる工風が一番である。

我々は英吉利より印刷機械を持つて來て居る、それで一人の士官と一人の水夫は此掛りを命ぜられて居つた、是等の力を借りて大晩餐會を張る時分には、此機械を利用して獻立等を造る、是等の活版及石版等は

最も我々を慰める一の材料となつた。

學校は十一月十一日より開けて、總ての水夫の如きは、此學校に入學し而して讀書を初として地理歴史算術航海術等を學んだ、水兵の中でもアルハベットより初めた者は僅に二人のみであつた、それは丁抹の馭者ヒーターソン及土民のニコの二人であるが是非英語を研究したいと云ふ熱心な希望である、此船の醫師も、之が教官となつて、非常に鞭撻の勞を取られた。

實に五十年以來大英國の教育の進歩は恐るべきものである、彼のバリー氏が北極にあつて學校を開いた時分には文字を知つて居る水夫は僅に一人であつた、然るに今日アレルト號には五十五人の人間の中文字を知らざる者は二人よりない、加之彼等は熱心に勉強をする、凡そ此學校程平穏にして、最も薫陶の行屆いたものはないと考える、教師は生徒を教ゆるに熱心之に從事し其愉快と云ふものは他に見ざる所で

あるそれ故に日が進むに從つて、今まで字を書く事を知らざりし水夫の手に筆を握るやうになつた、又加減乘除を知らなかつた人間が石版を取つて頻に計算などを初めるやうになり、中には充分進歩して三角術を習ふやうになつた者もある、此學校が終ると各々は自由の體となる、茲に於て種々なる遊戯を催し、或は骨牌を弄し或は將棋などを鬪はす者もある、予の隣室なる大廣間は演劇場に充てられてあるが木曜日の晩には此處に於て必ず演劇を催す事になつて居る、日曜日は宗教上の儀式を執行する船中に於て最も我々を慰めるものは書物である、故に各々勉強研學に就ては怠らない、其他種々な遊戯を發明して人を歎かすやうな工風をする、併し是とても我故郷に遺したる妻子を慕ふ心を慰める事は出來ない。

前にも記した通り木曜日は演劇會又は幻燈會などをする、其番附は例の活版で印刷されて配付される、其晩は船員一同樂土に遊ぶ如き思を

なして充分に樂むのである

其外演說會を催す時もある、其番附の一例を示せば

天文學に就て　ナール大尉

人間の嗜好上に就て一言す　ジツファール少尉

植物學に就て　フエールレン大尉

大氣に就て　ウートン氏

光に就て　アロール少尉

歷史學　ホワイト氏

天文學　マーカム伯

北極に於ける食物　コラン醫

北極洋の植物　ビユラン氏

橇の旅行　ナール大尉

是が即ち其番附であるが、船員の總てが演說をすると云ふ譯ではない、

各々研究したる結果を報告するのであつて、傍聽者は熱心に之を聞く事を努める。

演劇などゝ云ふても衣服はないが、其衣服は水夫の巧妙なる腕に依つて種々な物を拵へる又道具立は士官中の繪畫に熟されて居る者が之を擔任する、其他ピヤノにしろ其他の音樂にしろ皆完全して居る演劇は縱令拙劣に演ずるも如斯地に於ては面白く感じて喝采するのである見物と云ふては時として海豚が見る位の事であらう。

第十五章

太陽は十月十一日より其形を隱して夜は次第に其勢力を增して來る、十二月二十一日其極度に達した。

タイムス新聞の如きも初めの中は多少見る事も出來たが十一月六日正午頃には殆ど之を讀むに苦む位になつた。

十二月二十一日の前後十五日間は空は澄み渡つて居るが正午と二午前零時との差が漸く空に依つて分る位である、此外には薄き光が南の方に現はれて太陽は此水平線下にあるかを感じさせる位であつた。

十月二十八日は即ちトラファール川の戰ひの紀念日である、事務監督者は特に晩餐の宴を張つて、ポルトーの美酒を飲む事を得た、献立には特に此アレルト號が冬籠りの所を寫眞にして之を石版となし、之を飾り、今一枚は佛蘭西と英吉利の戰爭の圖を飾つた、此日の食事は實に此の地に於ける珍酒佳肴が膳に上つたので今に至るも忘る事が出來ない。

十一月五日は英國の祭日であるが、爲に特に音樂を奏し、陸上には火を焚き海豚の毛衣を着たる人々は舞踏をしたり或は騒いだ、此炎々たる焔が天を焦す間に人影の寫るは一種の趣きがある、殊にモツス氏が紙を以て造られたる輕氣球の如きは此日の大景物となつて、一同拍手喝采をしたが、此焔を爲に忽ち灰燼となつて了つた。

隨分遊戯には耽るが各々其職務を缺くやうな事はしない、或は磁針器、氣象等の研究其他北極の旭光等は最も注意を怠らないやうにしなければならない、此寒氣激烈なる所に於ては斯う云ふ事業に身を投つは難事である、一通りや二通りの注意を以て居る位では中々充分な事をする事は出來ない、譬へば磁針の如きは餘り寒ければ碎けて了ふ、併しながら之に手などを付ける事は出來ない、手を觸るれば忽ち凍傷をする、其他人の息などは忽ち氷るが爲に機械などは曇つて來て明瞭を缺くやうになつて了ふ

極北岬は常に現はれて特に有樣を書くやうな必要は感じなくなつて了つた。

或場合に月が現はれて來る、此月が現はれると云ふのは我々に對して餘程旅情を慰むる一となり、其薄色せる光は此冬の憐れなる有樣をし

て我々の心を引立たしめる、それ故に天朗にして月の出る時分には日中の仕事を夜になし、月光を以て種々な事を處理する併ながら月が光を放つて居る間に陸地へ上つても餘り深入りをしないやうにしなければならない、霧又は雲が忽ち降り來つて自分の歸路を失ふ事がある、此冬籠の初め以來我々は散歩と云ふ事には成るべく注意をして船長より嚴命を下し此運動と云ふ事を船員にさせるやうにした、それ故に此船の傍に九百米突以上の長き道を造つて如何なる夜と雖とも運動の出來るやうにした、是は即ち不盡街道と名けて、我々が食事の後、散歩を試みる所としてあつた。

船室に居ると雨垂が落ちて來るが爲に、書籍の如きは棚より下ろし、其他の物品は他に仕舞はなければならない、殊に夜になると其不愉快さは殆ど堪られぬ位である、故に己れが寐る天井に毛氈を張つて之を防豫する、是が爲に濕氣も亦た甚しくして、或者の如きは一日間に五十二

本の蠟燭を點じて其濕氣を止めるやうにしたと云ふ話もある、それ故に態々傘などを翳して仰々しく手紙を書いて居るやうな事もある、又寒氣を防がん爲始終諸所の窓牖を塞ぎ居る爲に空氣も次第に腐敗して其不愉快なる事、實に名狀すべからざる程である、寒暖計が十五六度に昇る時分には諸所の窓を開放して空氣の流通を充分にする。

或日の事寒暖計は五度を指示した、正午になつて二度を指示したが、是などは最も奇異なる現象であつて是は西南より吹き來る暖き風より變化したに違ひないと思ふ、一般に氣候が暖く感ずる時には氷が一種の音を發して破れるのであるが、其氷の下に幾千萬の人間が住んで居つてそれ等が聲を出すやうに聞える、併ながら其寒さは舊に復すると同時に氷は凝結して、アレルト號の近邊は殆ど氷山を以て蔽はれて了つた。

幸にして衝突はしない、追々飲料水は減して來る爲に船員は一日二杯

の酒より飲めないのである、祭日には量以外の酒を飲む事が出來る、肉の如きも成るべく浪費しない事に規則を設けてある、即ち三週間に二度づゝ肉を喰べる規則である、併し罐詰物は非常に多く持來つた爲更に欠乏を告げる事はない

麥酒の如きは一週間に二度飲む事が出來る、毎月第一の土曜日は大祭を執行する事になつて居る、月に一遍づゝは必ず船員一同醫者の身躰檢査を受ける、又運動と云ふても日に二時間以上に渉る事は出來ない、日に二時間以上の運動をするに最も好良なるは自動鐵道であつて月夜の晩などには最も盛んに行はれるが一時間に百米突の速力を以て走る事がある、其愉快なる事は到底豫想する事が出來ない、速力も激烈なれば危險も一層であるが氷は餘り硬くない軟いが爲に非常なる負傷をする事はない、予が連れて來た所の犬のヂリーと稱するものは此迅速なる自動鐵道を見て非常に驚いた、併ながら此寒氣は犬に取つて

心地宜きものと見へて活潑である、足は凍傷を防ぐ爲にフランネルの靴を拵へて之を穿かしめた、予が運動を試る時などは予に隨伴し來り、夜は予の船室の腰掛に睡つて予の番を努めて居る。

曾て予がヲヨセヘンリー岬に旅行をした時に橇を曳ける中の一頭の犬が神經病に罹つて倒れた、餘儀なく群より放して之を捨てたがそれより一週間を經た時分に其犬は近邊を逍遙して居るのを見た、故に之を呼戻さんとしたが彼は戻つて來ない、遂に之を捨てゝ來たがアレルト號を去る事四ミルスばかりの所に於て形を見失つた、それより冬籠りの事業が非常に忙しくなつて殆ど此犬の事は忘れて居つた、然るに二月ばかり以後に一の獸の影が氷の上に現はれた、是れこそ我々が殘した所の犬である、呼んで食物を遣り或は水などを飲ませやうとしたが近いて來ない、他の犬等は之を見て頻に追拂つた爲に、彼は何處へか影を隱したが翌日再び現はれて來た、其時は趣く之を捕へる事も出來

たが此時は骨と皮ばかりになつて居つた、種々介抱して遣つた爲に翌春は橇を曳く良犬となつた、此犬は如何にして長き日月を過せしかを我々に話す事は出來ないが、恐らく狼群に入つて居つたものだろうと考へられる食物は如何にしたかと云ふと、此地方に居るレンミング等を捕へて之を食料とし命を繋いで居つたものではないかと信じられる。

第十六章

十二月二十一日。船員一同何となく樂し氣に見える、太陽は南北の極度まで傾いて了つて、今日は我々の方に向つて再び復歸する時である、實に歳月の經過の早きに驚くの外はない、耶蘇祭即ちクリストマスは最早到着して來た、彼の來着は料理番より發する好良なる香に依つて初めて確信する事を得た。

此日の食膳に上るものは最も山海の珍味を選ぶ爲に、事務長は年來貯へたる寶藏を開け未だ曾て有らざる所の大宴會の用意に取掛つて居る前晩より、船員は總て休暇となつて此日は各々充分に樂んで過ごさうと云ふ決心をした。

英國を出發する時分にクインスタウンの貴夫人達は特に此アレルト及デクーヴエルト號か北極に於て基督祭に際會するを豫見して二つの大なる箱を紀念として贈られた、其中には種々なる玩弄物を初として貴重なる物品が充滿して居つた、各士官達は其分配の物品を受取り、水夫も亦た贈與品を得る事の榮を得た、吁々貴婦人達よ我々が此二大箱を開く樂みは實に非常であつたと云ふ事を知られん事を希望するのである。

當時玩弄物の發明者として有名なるメーソン氏も種々なる贈物をされた其他令孃方より贈られたる所の物品は殆ど山を爲して居る位で

ある、基督祭の前夜は非常に愉快を以て終つた、ピヤノは最大室に湧きて十二時までと云ふものは各々舞踏をなした唯だ婦人の居らざるのが最大遺憾である、又水兵の如きも同じく此譜に連れて各々舞踏をなして樂んだ。

二十五日即ち基督祭の當日は、氣候激寒にして西南の薄風は空合をして何となく穏かならざらしめた、朝の内は宗教上の祭典をなした、それ故に互々に祝詞を呈する爲め部屋々々を訪問した。

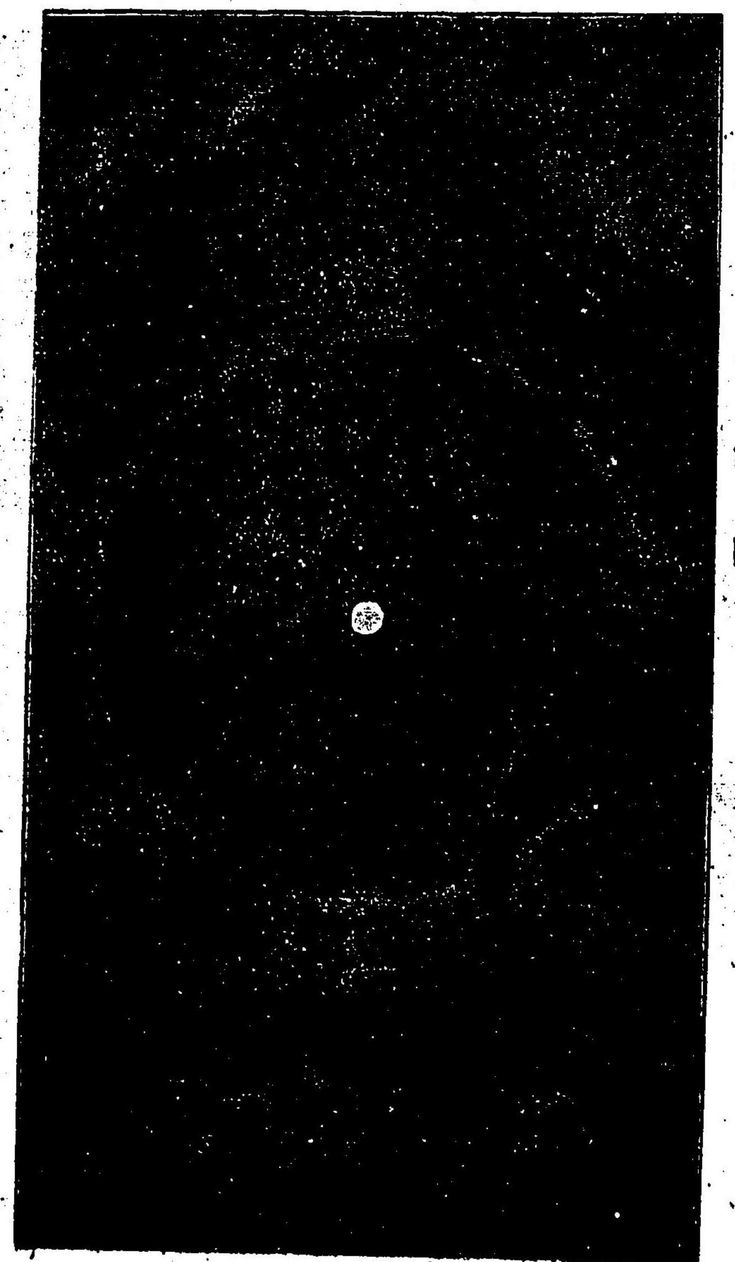
午後は再び舞蹈會となつて六時頃に晩餐會は初まつた、唯だ我々の驚きしは此机の上に飾られたる花籠である、是ぞ北極に於て見る能はざる物であるが是は英吉利を出帆する時分に某夫人が特に注意されて我々に贈られたものである、其精巧なる摸造繪畫其花の配合と云ひ實に眼を眩せんばかりである。

晩餐中は音樂を奏し、又卓上には二三の演説などもあつた、斯くの如き

十二月二十五日は何れに於ても見る事は出來ないであらう、今我々の居る所は人跡到らざる最も高き緯度の所である。

我々の鄉關を去る幾千哩の端に居るか、既往を回想すると感慨に堪えない事が多い、我々は無人の地に在つて如斯日を迎へ、るは夢であるか、幻であるか、窓を開いて北風に面を曝しつゝ表の方を眺むれば大英國の國旗は翩々として風に飜るを見る、其他眼に映ずるものは渺茫たる氷原であつて、我々は何日此地を去る事が出來るであらうが、一陽來復の時こそ、我々が活動し初むる時に相違ない。

既に冬の半は過ぎて了つた、百五十日間の夜と云ふものは實に人をして沈欝せしむるけれども、我々は此苦みを知らずに經過する事が出來た、唯だ望むは太陽が再び歸つて來るを願ふばかりである、此遠征に出立して以來病氣に罹つたものは唯だ一人であつた、新年に至つて尙三人の病者を出したが間もなく全快して其他に病者はなかつた。



北極の太陽

此地に居る中に最も我々をして奇感を起さしめたのは毎日夜に入ると狼の聲の如きものが聞える一事である、それ故に犬をして探索せしめたが影も足跡もない、是は氷が風に當つて鳴る音か何かに違ひないと信じられる。

日暈又は月輪の重出が度々ある、時としては其形狀の奇なるに驚いた其他種々なる奇觀を呈するけれども、一々之を記るす事は出來ない、或晩の事予の居る所より餘り遠からざる所に於て東南より西北に飛べる流星を見た、其色は光ある綠色にして、過ぐる時は靜かに聲もなくして船員の中で煙花でも揚げたかと思つて見て居つた、然るに地上近くなるに從つて赤綠色になつた、是そ予が見たる所の最も麗しき流星であつた。

第十七章

船中の詩人某氏が作りたる祝詞は印刷に付され、献立書は食事の時に我々の机の上に乗つて居つた、即ち千八百七十六年一月一日である、萬里懸隔の地、殊に文明の世界を離るゝ遠き所に於て新年を愉快に迎へられた、嗚呼今年の未來は如何なるべき、天我を助くる事深ければ我々の目的は必ず達せらるゝに違ひない、去年と雖も、我々の事業は決して不成効に終りはしなかつた、無論今年と進ども其點に於ては變りなき事を信じて居る。

船員等は十二月三十一日の夜と一月一日の境に於て十六度鐘を打つ、即ち其内の八點は去り行く年に暇乞をする爲に打つのである、此地に來て從來の風習を變へる事は望まない、それ故に午前零時に船鐘を鳴らして今までの習慣を保存した。

一月一日正午船の最大室に集つたが、此處には種々なる食料品が飾られてある、其他ウエスキー酒、又ポンチなどは洋盃に溢るゝばかりに酌がれてある、之と同時に船醫は杯を取つて船員の健康を祝した、之が濟むと我々は一齊に唄を謳つた、此時室外に於ては音樂を奏して之に和し寒さも忘れて了つた、又夜の如き闇黑にあると云ふ事を感じない、唯だ將來の好結果ならん事を希ふのみである、唯だ我等の一日も早く望みを遂げて本國に歸りたいと云ふ考を起したのみである、今日まで此邊に遠征したる者が如斯までの好結果を得て居る者はないと信ずる、如斯柔順なる人等を伴ふて此處まで來た船長はないだらうと思ふ醫師の診察に依れば十二月よりは船員の體質總て好結果を表はして居る食慾の如きも皆々昂進して居るのみならず、英吉利に於ける我が朋友の如きは食膳に麝香牛のビフテッキを味ふ事の出來ざるを氣の毒に思ふ位であつた。

二日。此日初めてクレッソンを食した、此野菜は總て箱に入れ、土を以て掩ひ、暖爐の傍に置いてあつたのである、其保存法などは實に注意をして居つた爲に長き間も保存する事が出來た。

九日。南風非常に吹き荒み一歩も船外に出る事が出來ない、殊に寒暖計を檢査しに往く事さへも出來ない位であつた、此風は四十八時間も吹き續いた、それ故に甲板上には少しく破壞した所もあつた。

十七日。正午頃南方に細き金色をなし赤味を帶びたる一線を見出した、是ぞ太陽が水平線上に現はれる報知であつて、我々の悅びは非常なものであつた、太陽を見ざる事が長くなるに隨つて身躰の疲勞を感するのみならず又不愉快は非常なものであるが、今や我々の渴望する所の太陽は現はれ來らんとする、各々は此太陽の現はれるを待つて仕事に取掛らんとして居る、殊に橇などは太陽の光がない以上は殆ど乘を事が出來ない、又獵師の如きも闇夜では獵をする事も叶はない、最早此

夜と云ふものも追々減じて來て二月一日正午頃には漸くタイムスの字を讀む事が出來るやうになつて來た、最も近視眼なる一人の士官は皆に先つて未だ充分に見さる中に書を讀む事が出來た。

今日に到るまで寒さの激しい中にも多少凌き易い時もあつたけれども、正月の末に及んで彌々寒さは激烈になつて零度以下四十五度に降る事があつた、如斯場合に際しては其身の凍結を防ぐ爲め充分の運動をしなければならない、其寒氣の激烈なる爲め殆ど呼吸の苦みを感する位で眼などは涙が出るとそれが氷つて了ふ、幸にして去秋の經驗がある爲に餘り危險もなかつた。

數日前の事でありしが船員の一人が寢臺より降りんとして、圖らず己れの一脚が恐るべき黑き色をして居るのを見た、是ぞ即ち凍傷である、漸く醫師の力に依つて全癒する事を得た、此寒氣の激烈なるを表するには最も著しい事がある、各々が呼吸をすると、其息は直ちに氷つて了

ひ、顔は殆ど氷を以て蔽はれて了ふやうになる、偶々外を散歩して歸つて來れば、帽子を初として總ての物は石の如く氷るのである。

或日の事でありしが士官の一人が磁針器の檢査をするが爲め一室に這入つた所、一種異樣なる臭氣が鼻を襲ふて來た、何物ならんかと洋燈を以て之を見るに一の大なる獸が居る、之を見て非常に驚き、同氏は元の所へ來て友人等に話した、同僚も驚いた、それは恐らく熊などが居るのではないかと云ふ考を以て、充分に檢査すると、豈圖らんや、我々の連れて來たエスキモーの犬が此處に隱れて居つたのである、エスキモーの犬は一種異樣の臭氣を放つもので、妙な臭ひをしたのは即ち此犬であつたのである、後に於て同氏が周章たる有樣は一の笑話になつて居る

漸く太陽も現はれて來るやうになつたので、アレルト號は此冬籠りより出で進航せんと云ふことに努めた、此日光の薄き光は、五箇月間太陽

を見ざりし凄然たる顔色を照す、其光は何となく薄きが爲に各々の容貌は一層凄く見える、茲に至つて初めて日光の勢力は殊に人間の生活上に必要であると云ふ事が分る、其日光あらざれば到底萬物活きて居る事が出來ない、船員の悅びは之に過ぎないのである、是よりして此近邊を探險する事になつた。

二月の終になつて四五匹の兎を見たが、忽ち之を打つて三頭を打殺した、レンミングは最も數多くして到る處、足跡を見る、去年の秋ローソン氏が築いた所の小屋を見んとして、予は此地に往つた、豈圖らんや物品は一もなくして唯だ僅に鐵葉製の箱に殘した煙草のみがあつたのみで、ビスケット、臘干、茶、砂糖の類は總て失つて了つた、我は如何にして是等の物品が紛失したかに就ては疑を起した、此處には冬の間他の獸は居らぬ、纔に狼位のものである、此狼等が如何にして之を持去りしか之は一の疑問である、其近邊を檢査すると果して獸の足跡を得たが、是は

狐にあらざれば犬が斯の如き處業をなしたと云ふ事を認むる事が出來た。

日光は遙に現はれて來る、茲に於て橇の旅行の準備に掛つた。

二十五日。學校は最終の日として閉校する事になつた、休暇は此次の冬までゝある、二十四日木曜日最後の演劇會を催した。

第十八章

二月廿九日。此日は初めて太陽が水平線上に現はるゝの日である、翌日は總ての般員等に休暇を與へて之を祝した、其日は此邊の高き所に登つて太陽の現はるゝを待つて居つた、豈圖らんや太陽は昇らない、唯だ纔に北方に五色の色を放つたのみである、カルイズの高丘又は其連續せる高丘はローソン岬より南の方に延長して居るが、是ぞ我が緊要なる天文臺である、高さは百三十米突の高さにして、充分觀測するに適して居る、此日は過ぎて彌々二十九日となつた。

午前十時船中に殘る者は一人もない、外に出ずれば諸所方々の氷の上に黑き一帶が印して居る、是ぞ即ち太陽が現はるゝに違ひないと云ふので、皆其姿を眺めんと待つて居つた。前夜彼等が希望したのは、天文學上に依れば二十四時間位は必ず早く現はれるに違ひないと考へたが爲であつた、併し今日は必ず水平線上に現はれるに違ひないと云ふ事を確信して居る、果して正午頃になつて、金色せる矢の如きものが天に輝き初めた、而して正午に過ぎて了つたが、又此日も本體を見る事が出來ない、翌日初めて其形を見る事を得たが、併し充分に觀測する事は出來なかつた、太陽が出た爲に多少暖氣を帶びたやうな感を持つたが、或は神經であたつかも知れない、氣候を檢すれば零度以下四十七度に降つて居る、然るに一種の奇象を呈したのは、此太陽の現はるゝと同時に最も激烈なる寒さは到着した、二月の末に於て寒暖計を次第に降つて

三月四日に至つて零度以下六十一度になつた、是は我々が今日まで遭遇した最大低度である、三日の正午より四日の正午までの平均は零度以下五十八度、三日の午前四時より四日の午前四時までの平均は零時以下五十九度、二日の午後六時より四日の朝の六時まで三十六時間の平均は零度以下五十八度二分の一である、三月中と云ふものは先づ平均五十一度と云ふ寒さであつた、此酷烈なる寒さの時に船中より非常に悦びの聲が起つた、是は我々が此寒さを利用して種々なる物件に依つて寒さを檢しやうと云ふ考である、譬へて見たならば、倶里斯林の如きは零度以下四十七八度に堪へるけれども五十九度に至ると凝結して透明となり、亞爾個保見の如きは殆ど油の如くなつて了ふ、ラム酒は之を小さなる匙などに入れると直ちに氷つて了ふ、少し深き物に入れたならば、殆ど蜜の如き有樣を呈する、ウエスキーは角砂糖の如くなり、之を飲むには溶解して飲まなければならない、唯だ此天候に堪えたものはコロロホルムのみである、寒暖計の如きは出立以前に充分檢査したが爲に決して誤りはない、水銀などは凝結して何の役にも立たない、縱に太陽の光が我々を暖めると云ふやうな感じをするのみである、太陽の光線中に寒暖計を曝しても寒度以下十八度位より上らない、此時より雪の上にはプタルミニヤンの足跡を見る事が出來た、又ラコペードと云ふ鳥が諸所に飛ぶを見た、是ぞ春を知らせる鳥であると云ふので我々は非常に悦んだ。

三月十五日。日蝕があつた、寒氣は甚しいけれども一同甲板上に出て之を觀察する事に努めた、此日蝕は午後四時六分より初つて六時に終つたが、太陽の半以上を蝕した有樣である。

月半にして船の艙に掛けたる屋根を取つた爲に日が差込んで日光を浴びる事が出來た、併し氣候は激寒の爲に未だ他の物を取る事が出來ないが洋燈などは充分に清める事も出來るし今まで船中で晝夜の區

別なく使用した蠟燭を消す事が出來た。

五月の半頃であつたが雪は總てなくなつて了つた、即ち此雪は七ヶ月の間此アレルト號を取卷いて居つたのであつた、此冬籠りの間に於て最も危險なるものは火事である、故に此危險を充分に豫防した、

此時に於て士官等は冬期觀測に使用せる器物の不用に屬するが爲に之が荷造を初めた、蓋し今より橇に乘つて旅行する時分には是等は雪解の損害を蒙るのであるから、今日に於て充分注意をしなければならぬ、是よりして我々の事業は初つた、水兵などは非常に忙しくなると同時に規則正しき勞働をする爲に身體は健康になつた。

四月一日。甲板に番せる水兵は一の獸が此船の傍に現はれたと云ふ事を叫んだ、是は熊であらうと云ふ考を持て直ちに銃を取つて甲板に現はれた、豈圖らんや熊にあらずして北極の狼であるが、此聲を聞き付けて何處へか遁げ去つて了つた、正午予は犬を連れて散歩を試みた、然

るに予の後ろに一の獸が現はれた、是は黃色を帶びたるエスキモー犬の大なる如きものである、不幸にして銃を持たざる爲之を打つ事が出來なかつた、夜に至つて麝香牛の足跡を見出した、獵師は數吉羅米突の間之を搜索したけれども遂に其踪跡を失つて了つた。

第十九章

日の長き間に我々は橇の旅行に就て充分に熟考した、此點に就ては我々より以前に此地を旅行せる者の旅行記又は橇の事に就ての書物を充分に研究した、故に此計畫に就ては充分遠算なきやう又其健康は勿論の事、種々なる障碍を排除するに就ての手段は講じたのである、我々の乘る橇、天幕其他の物は總てマッキクリントック氏の監督の下に英國に於て用意された、氏は橇に依つて北極旅行を企てたる先頭者である、之に充分な改良を加へたものであるから殆ど完全して居る。

殊に我々の造りし橇の如きは雪が最も凝結して居る時分には一人に就て二百四十斤を曳くことが出來る、之に載せたる物は前に述べたる如き材料であるが、其中には醫術上に用ゐる針までも備つて居つた、四十五日間の旅行に對して即ち左の物品を携へた。

橇	一切
天幕	一切
毛布	
大寒に對する被布	
蒲團	
防水布	
帆	
寢袋	
鋤	

鍬	
食料を詰めたる袋	
料理道具	
銃	
彈藥	
醫療機械	
藥品	

是が一の橇に積まれてあるのである、此重量の總計は五百八十四リーブル十二オンスにして、之に人を加ふれば千六百六十四リーブルと十二オンスばかりになる、故に之を七人に割れば一人が二百三十八リーブルを曳く譯になる、之を以て七週間近くの旅行をしやうとするのである勿論其秋に於て經過せんとする道に藏を建てゝ置く必要がある、而して春になつて旅行をする時分に先づ二十日間ばかりの食料を載

せて往くとすれば先づ三箇月程は充分に旅行する事が出來る、此藏と云ふものは充分に地位を撰んで建てなければ之を見出すに於て甚だ困難である、霧或は雪其他の天災の爲に之を見出す事の出來ない事がある、それ故に其地位と云ふものは成るべく見出し易い所を撰ばなければならぬ、それで此力を借りずして、充分に長き旅行を試みんとするならば、橇の數を增すのである、是等は隨分疲勞を感ずる旅行であつて、先づ其當を得たものは六週間を限りとするのが適當である、我々の持來りし天幕は雪或は風等を充分に防ぐ事が出來る、其內部も隨分廣い各々は三十五サンチメートルの所を占領する事が出來る、勿論頭は枕に乘せ足は他の者と接續するやうになる、それ故に一人が體を動かすと自然其傍に寐て居る者の邪魔をするやうになる、其他充分な用意をして着物などの製法と云ふものも、又充分に注意して拵へてあつた、食料の如きは前旅行者の携へて來た分量と殆ど同一である、併し

酒は成るへく減じた、而して茶砂糖などを增加する事にした、即ち此處に一日一人に就ての量を擧くれば

臘干	四、オンス
ビスケット	十四、オンス
箱入馬鈴薯	二、オンス
チヨコレート	一、オンス
チコレート用砂糖	〇、五
茶(日二回)	〇、五
茶に使用する砂糖	〇、五
鹽	〇、二五
胡椒	〇、五
カレー粉又は麥粉	〇、一二五
ラム酒	二、オンス

亞爾個保兒　二、オンス
煙草（一週間に付）　三、五
肉膏　一、リーブル
牛羊の硬油　三、オンス

此食物の量に就ては隨分異論も起つたが今日現存して居る北極探險者のマッキクリントック氏は最も當を得て居るものと廣言した、それで英吉利人は頻にレモンを持たざりしを非難した、是等は船に居る間は適當して居るか知らぬが、橇に於ての旅行にあつては氣候の爲に堅き事石の如くなつて之を溶解するには非常に火力を要する、それ故に壜などへ入れたものが氷つた場合に於て之を暖むれば總て失つて了ふのである、經驗のない人等は斯くの如き事を云ふけれども、到底實行は期せられない、六月になつたならば初めて之を使用する事が出來る予の如きは此事を知つて居つたゆゑに、レモンの汁を壜に入れて持つ

て往つたが、之を使用する事の出來るやうになつたのは六月になつてからの事である

コラン醫師に此度の旅行に就て幾條の注意を爲した、其他萬一の危害などの時に於ては如何なる方法を取れと云ふことを精しく教えられた。

我々が此衣服の事に就て少しく話をすれば先づフランネルの厚き着物を着て而して其下に木綿の襦袢一二枚を着、其上に絹と毛織の長き襦袢を着する、之に暖き洋袴を着けるのである、腹には毛布を卷いて、頭には小な帽子を被り、其上に耳、及び首を蔽ふ所の物は海豚の皮を以て造り靴は毛の充分に蔽ふたる所の靴であつて膝まで達するやうな物である、是等は總て充分の用意は出來たが、道を歩るくには始終眼鏡を掛けて居らなければならない、是等は天幕へ這入つてからでなければ取る事は出來ないやうになつて居る、我々の着る外套の上には種々な

繪を書いて、而して雪ばかり見ないで前の人の背を見て樂むやうにしてある、此繪はどう云ふものが書いてあるかと云ふと、或は驢馬或は熊などが妙な風をして居る繪が書いてある。

是は眼を養ふ爲に書いたものであるが、之を判じると種々な意味が出て來る、水夫も士官も別に違いはない食物も皆な同じである、又寐る所の薄團の如きも同一である、總ての士官等の往くべき方向はそれ〳〵定つた、我々の前に如斯企てをして遠く這入つたのは彼の有名なるパリー氏が實行したのみである、萬一危險に遭遇することあるも、到底我々を救ひに來る事などは出來ない、それ故に充分の用意が必要である、茲に於て彌々出發する事になつた。

第二十章

船長ナール氏は長らく斯う云ふ事を考へて居つた、それは若も太陽が顯はれて其光りに浴する事が出來たならば、遠征に立つ前に、我がアレルト號を距る南方八十吉羅米突の所に居るデクーヴェルト號に人を送つて見たいと云ふ考である、デクーヴェルト號は如何なる所に我々が居ると云ふ事は殆ど知らないのである、又彼等は我々が如何なる港に冬籠りをしたかと云ふ事さへも知らぬのである、既に七箇月以來通信なども絶えて了つた、茲に於てか使者を送つてデクーヴェルト號を訪問させる事に決した、エシヤート大尉は即ち其任に當る事になつた、又ローソン氏も同じく此行を共にする事を望んだ、と云ふのは氏はデクーヴェルト號の船員であるが爲である茲に於て十日と云ふ日限を以て櫂に食料などを積んだ、若も十日間にデクーヴェルト號を見出すことが出來ないならば、リンコルン灣に造つた所の倉庫より食物を取つて宜いと云ふ許を與へた、即ち此灣は道の半にあるものである、ピータローソンは此櫂を馭するものとして、氏に隨行する事になつた、十一日は

餘り寒氣が甚い爲に十二日、日曜日を以て發する事になつた、朝來は非常に寒かつたが、次第に寒暖計は昇つて零度以下三十四度になつた、日和も宜し、晴雨計も晴天を報じて居る、故に船員は寄つて集つて手紙を認め、暫くして萬歲聲裡に此處を出發する事になつた。

それより二三日間出立したる所の友を想ふの念は絶えた事がない、再び寒さは非常になつて來た爲に彼等の健康を氣遣ふのみならず、時としては天に向つて氏等の健全を默禱する位である、三日目になつて氏等は悄然として、此憐れなるピーターソン即ち馭者を連れて歸つて來たので我々は非常に驚いた、ヱヤートン氏の語る所に依れば、此船を出でゝより殆ど五時間ばかりの後に、寒氣甚だしくなつて來て、凍結が甚だしい、茲に於て餘儀なく天幕を張る事になつたが、夜は比較的暖かつた、翌朝出發した所午後一時頃になつてピーターソンは胃に非常な痛みを感じた、茲に於て暖き茶を飲ましたが、彼は食慾と云ふも

のは更にない、寧ろ物を食さない方が宜いかも知れない、臘干の如きは氷つて殆ど用に供する事が出來ない、益々道を進むる所彌々險にして犬さへもそれを攀登を事をしない、ピーヌーソンは病の爲に疲れて到底馭する事は出來なくなつて來つた、予及ローソンは非常に力を盡したけれども充分な結果を得ない、其日の夕刻になつて馭者は彌々病氣になつて時々寒慄を來し、殆ど十分間毎位に體を摩擦して遣らなければならない、是が爲に我々も同じく寒さを感じ激烈なる寒慄を感ずるやうになつた、餘義なく天幕を張りピーターソンをして、先づ着物を變へさせ、而して寐袋の中に這入る事を命じた、其間我々は食事の用意を又犬などの注意をして居つた。

ピーターソンは胃のみならず脚部に非常の痛を感じ初めた、是は我々の命じた通り着物と靴とを代へる事をしないが爲である、茲に於て我々は其靴を脱がして外の靴を穿かした、而して藥を與へた所幾分か快

癒を覺へたやうであつた。

翌朝は風寒くして出立する事が出來ない、彼は又再び容躰が悪くなつて夜中苦んだ痙攣の如きは實に間斷なく起る、午後に至つて、彼は一層苦しみ初めた、呼吸も切迫して來るし、手足などは總て凍結して居る、我々は暖きフランネルを以て之を摩擦したりなどするけれども、彌々容躰が悪るくなつて了つたが爲に、最早進行する事の考を罷めて、天氣が快くなつたならば、戻らうと云ふ事に決した、それて寒氣激烈の爲に足等は氷つて了ふ、遂に體熱を以てピーターソンの體を暖めたと云ふ話である、併ながら彼は益々苦むのみにして、食物も喉を通らない、茲に於てか斷然歸る事になつた、彌々歸路に就く時分には、犬は歸途に上りし事を知つたので非常な勢ひを以て走つた、併し道は遠いが時々車を止めてピーターソンの體を摩擦して遣らなければならない、如斯して漸く今此處に到着したが、我々は此處に來た時に、彼に向つて船に歸着したと云ふ事を云ふた所非常に悦んで何か一二言、云ふたやうであつたが、其言葉は最期であつて、是より二箇月の後に彼は永眠の客となり、其屍體は一行の紀念として此邊の高丘に葬つた。

エッヤートン氏は斯く言ひつゝ尙ほ言ふにはデクーヴェルト號の使者として出發しながら其責を果さずして歸着したは實に殘念である、と云ふ事を頻に云つて居つた。

二十日。午前是等の二士官は、再び出發した、二人の水兵は一の橇に七頭の犬を連れて隨行する事になつた。

此度は非常に艱難辛苦を侵してデクーヴェルト號に到着して我々の有樣を話す事が出來た。

第二十一章

四月三日。月曜日、此日は大計畫に着手しやうと云ふ紀念日である、此

日を以て我々は彌々北極の眞價を探らんとするのである、天氣は清朗であるが、寒さは酷烈である、橇は七個、其中の二個は北極の遠征上に必要なる二艘の船を荷つて居る、而して一線を爲して出發する事になつた總ての人數は五十人であつた、最も撰擇をしたる者等である、彼等は生命を賭して、北極探險の大望を有つて居る者である、既に二日間實驗をなし其後に於て、是等の者を呼び出し任務に堪ゆるや否やを問ふた時に彼等は無論耐え得るとの一言を以て答へた其前晩は日曜日であるし、ピユラン僧正は祈禱などを爲し聖歌を謳ふて、我々の前途の安全なる事を神に祈つた。

各橇には旗を立て此處を出發したが其有樣は實に壯快であつた、第一をマルコポロとし第二チヤンピオン、ヴヰクトリア、ポッピー、ブールドーグ、アレキサンドル、リミエー、順次整列した、此中アレキサンドル、リミエーの二艘は三日間我々の一行に隨ふて、其模樣をアレルト號に報告

する事になつて居る。

午前十時彌々進み初めた、船長其他士官等は數百米突の間我々を送つて來たが、遂に萬歲を三呼して袂を別つた、第一日の程は行程も短くあるが、橇を曳くと云ふのは實に疲勞を感ずる事甚しい、我々は度々試みた事はあるけれども彌々實地に就て苦しむと云ふのは仲々困難である、殊に氣候は零度以下三十六度に降つて居るが爲に日々の記事などを帳簿に書く事は非常に困難であつた、五時三十分殆ど十吉羅米突の道を行きて初めて停宿する事になつた。

此地は後ろに峨々たる山を望み、前には渺茫たる氷山を見るのみにして甚だ淋しく感じた、此處に七の天幕を張つて、而して伴ひ來れる者等は此一夜を明す停宿所の爲に種々用意を爲さんとして奔走し、事務長は夜の食事に就て吸々として居る、又暴風雨などに對する用意も出來た後に、我々の最も尊敬する袋の中に這入る事を得た、而して暖き茶が

出來て之を飲む時の愉快は非常なものであつた。

睡に就かんとしたが寒氣甚しく充分に睡る事が出來ない、翌日は如斯苦しみをせずして必ず好良なる氣候に會するに違ひないと云ふやうな空望を抱いて其夜を明す事になつた。

四日。激烈なる寒氣を過して早くより眠りを覺まし一刻も早く此處を出發しやうとした、此邊では夜の中に着物や寢床が冷へて了ふ爲に之を脱替する事は甚だ困難である。

翌日寒暖計は零度以下四十三度に降つた、其夜は殆ど寢る事出來ずして血液の運動を付ける爲絶えず體を動かして居なければならない、顏及手足などは眞に凝結して了ふ、併ながら充分なる用意をして居る爲に僅に痛みを覺える位で不幸な結果を見なかつた、天幕の紐其他我々の寢袋などは板の如く凝結して居るゆゑ、之に觸れないやうに注意しなければならぬ、若も顏などを觸るゝ時は直ちに皮は剝げて了ふ、カレ

ー粉の如きは氷つて殆ど用を爲さない、咽喉の渦する事甚しく、充分に水を飲まざれば死するやうな苦みをする、併し水は凝結して飲む事が出來ない、故に雪を解かして之を飲む、雪を其儘食するなどは最も危險な事である、是は一行中充分に嚴禁してある。

五日。リミエーはアレルト號に向つて歸る事になつた、此時纜を曳く一人の者は到底任務に耐えない爲に連れ歸る事を命じた、其代りとしてリミエー付の者を一人殘す事になつた、船長は我々が健康倍々壯にして、又其勇氣も勃々として居る事を知るに違ひない。

十日。倍々進んで彼のジョセフ、ヘンリー岬の傍に建てたる倉庫の傍に到着した、此庫は缺くる所なく總て整ふて居る、此日は食料品を分配する事に忙しくあつた。

十一日。雪は深く殊に霧を交へて、明方は咫尺を辨じない位である、此日ブールドージ、アレキサンドルの二艘はアレルト號の方に歸る事に

なつた、是より我々は彌々北極の方に進まなければならない、我々の萬歳を叫ぶ聲は天地に響いて反響する、次第に我が友等の影は見えなくなつた、雪は倍々激しく降り空は彌々暴れて來る。

第二十二章

此所よりして氷は一層甚しくなつた、漸くにして大山脈を越えて疲れを休めんとすれば斷崖絶壁の氷山が現はれる、宛も打寄せたる涙が一時に激烈なる寒氣の爲に氷つて此山を拵へた如き樣子がある、隨つて我々の進行も非常に遲い、進むには鋤鍬の如き物を以て之を碎きつゝ進むのである、是等が我々の進行を妨げるのではない、雪は降り積つて非常な高きになつて居る、時としては體の半以上雪の中に埋められて了ふ、それ故に橇などは走る事は出來ないのである、之を進めんとするには非常な時を費し橇より荷物を下ろし再び積むやうな不便が起る

のである。

四月十五日。不思議にも天候は昨日來とは違ひ、寒氣は凌ぎ易くなつて夜の如きも餘り苦痛を感じないやうになつた、天幕の中などは寒暖計は零度以下八度二分の一迄に昇つた、今日までは十七度以上に昇つた事は一度もない、我々は成るべく太陽の光に體を暖めながら進まうと云ふ考で日々旅行は正午より夜十二時までを進行の期として居る、朝九時半に料理番を起す、十一時半に總て橇の用意が出來、朝餐の後に使丁等は雪を掻き初める、其他の一部は天幕を疊む。

此日は天氣清朗であつて太陽の光も暖い爲に自然に濕氣を覺えて來る、雪は太陽の光を受けて壯快なる色をなして居る、それ故に我が歩る所の氷の上は、宛も寶石を以て敷き詰められ金剛石、ルビー、エムロド抔が煌々として光つて居るやうである、如斯驕奢の物品の中に身を埋めて居る如き思ひをしつゝ恍惚として眺むると同時に橇を曳く使丁

等の有様を見ると今までの考も何れへか消えて了ふ、彼等は醜悪なる着物を着手の指の如きは凍傷の爲に形なく、肩は疲れ、消然として曳く様子などは實に憐なものである、此邊に於てポレンミンゲの足跡を雪の中で見出した、如何にして如斯動物が此隔たりし所に來りしやを考えた、此處より進めば一の氷山が現はれて來た、高きは二十ピエーにして其麓に一夜を明すことになつた、晩餐を用意する間に使丁共は翌日の道を切開く事に從事した、此凹凸の甚しき土地を往く程不愉快なるものはない、橇は進む事が出來ずして、一歩毎に止つて之を助けんとする苦みは一通りでない、隨つて之を曳く使丁共の疲勞と云ふものは甚しいけれども之れを掩はんとして成るべく愉快なる躰度を取つて居る。

氣候は實に好良であつて、零度以下二十度より二十八度を昇降して居る、太陽は時々其光を見せるが寒暖計は零度以下三十六度に降つた、是より此處を出發して敷吉羅米突往くと又八米突より十米突の高きの氷山があつて之を越ゆる事は難しい、故に堅道を造らなければならないに於て此日は此工事の爲に一日を此處に費すことになつた、一同は鋤鍬を取つて熱心に勞働に從事した。

十四日。夜來寒氣酷烈なりし爲寢床の如きは總て凍結して了つて、之を疊むに非常に苦んだ、此寢床の中に寢る鹽梅は宛も革提又は鑵の中に寢て居るやうな心持がする、此日は金曜日であるゆゑに聖書を繙いて讀んだ、骨を徹す如き寒き風は北より吹き荒さんで居る、面貌は勿論鼻の如きは凍結せんとする危機に逼る事がある、ヴョゼフヘンリー岬を越えると、此海上の凍結は一層強く見える、我々は平常よりも一時間早く停宿する事になつた。

予が乘れる橇に附從せる一人のヴョンシャーレーと云ふ者は膝と踵に痛みを感じた直ちに之を診察し嘗て醫師が指示した通りに療治を

行ふた、是ぞ他日憐なる事に陷る初めであつた。

十五日。寒暖計は甚だしく降り雪は倍々降り來つて進行する事が出來ない、餘儀なく天幕の中に於て運動を試みた、斯くの如き有樣に居るよりも寧ろ出立する事を望むのである、橇に於ける十二時間の旅行は牢獄の中に居るよりも愉快である、然るに外へ出る事は出來ない、雪を吹く旋風は我々の天幕の傍に捲き上つて居る、本を讀む力もなく又談話する力もない、毛皮は勿論毛氈の如きものは總て板の如くなつて了つた、之を以て見れば、恐く此北の方には決して自由に航海し得る海のないと云ふ事を信じられる。

十六日。風は漸く靜まつた、併し進行する事が出來ない爲に、我意に反して天幕の中に滯在しなければならない、既に四十八時間以上寢袋の中に這入つて居るが、予は四十時間以來足の感覺がない、午後四時、風少しく過んだ故に彌々出立する事に定つた。

シャーレーは最早歩行する事も出來ない、餘儀なく寐袋の中に入れ毛皮を以て之を掩ふた、是が爲に橇は重量を增して容易に進まない、併し如斯有樣であつたならば病氣も全快する事と思つた、午後十時半頃になつて休憩の爲め停止した。

ジョゼフヘンリー岬よりは遙に海及び氷を眺めた、此岬の高さは二百四十米突である、此地質は石灰質の如く見えた、此邊の山は高くして三百米突より六百突米の高さがある。

十七日。シャーレーは一層容躰が惡るい、のみならずバーレー氏の橇に乘れるジョーンボーターも亦た足に痛みを感じて、膝は非常に腫て了つた、茲に至つて二人の勞働者は殆ど力が竭きたのである、朝の內は天氣が淸朗であつて太陽も光つて居る、寒暖計も僅かに零度以下三十一度である、寒氣も次第に減じて來る如く感じられる、此時こそ、最も注意をしなければならない、何故なれば凍傷に罹る事が多いからである、

アルフレードビヤー氏の如きは、手の指一つを氷らして了つたが、幸にして血液の巡環と付ける事が出來て、其指を助ける事は出來たが、疼痛は尙ほ甚しかつた。

各々の勇氣と耐忍は實に如何なる事にも打勝つ事を信ずる、それ故に我々の働きと云ふものは此恐るべき氷原を苦もなく歩るくのである休むにも茫然として休む如きは最も不注意千萬の事であつて、忽ち其手足を氷らして了ふが爲に成るべく休む事をしないやうにしなければならぬ、それ故に疲勞の極に達して午後三時頃より少しく體を休めた。

十八日。寒氣は多少凌ぎ易くなつて、夜睡る事も出來た、朝出立前に橇を充分檢査して修繕等を試みた、佛蘭西の舊女王より我々に贈られた毛糸の帽子は寒る時分に被るに適して居る、此日は實に進行に苦しんだ、夜になつて東南の風が起つた、それが爲に進行を止めて天幕を張

つたが氣候は非常に酷烈である。

十九日。天氣清朗にして夜來は大に睡り易かつた、昨日の太陽は濕氣を乾かして、橇の進行は速かであつた若も病人がなかつたならば我々は一層愉快であつたに違ひないと考へる。

二十日。雪は降るのみならず霧深くして進行するに困難であつたが勇氣を皷して進んだ、予はヲッケンスの小說を聲高に讀んで使丁等の心を慰めた、午後二時天漸く霽れて霧も消へたやうであるから、倍々猛進する事になつた、八時頃になつて再び霧は起つて來た、一層勇を皷して進んだけれども、到底其望みを達する事は出來ず十時頃に停宿する事になつた。

二十一日。北風吹き荒んで居る、氷は昨日と變りはない、寒暖計は零度以下二十七度を示して居る、シンプソンは耳に凍傷を感じたが幸に早く用意をした爲に不幸の結果を見るに至らなかつた、此日ほど困苦し

た事はない、一歩毎に深き穴に足を入れる、幸にして手足を負傷しなかつたのは、實に天助があつたに違ひないと思ふ位である。

二十二日。前夜より風吹き荒んで今朝まだ止まない、寒さは酷烈であつたが、之に關せず出發した。

二十三日。進行は非常に遲く、軟き雪は我等を妨害して居る、夜になつて氷丘に天幕を張つた、病人達は一層容體が悪るい。

二十四日。終日道を開鑿するに努めた、高き所に上つて此邊の景色を見るに眼に入るものは唯だ氷のみである、使丁の勞働は尚ほ一層困難を極めた、此日北緯八十三度を越えた、如何なる人も今までに如斯高緯度に上つた事はない、千八百十八年の議會に於て此線以上を越えた者には千磅以上の金を與ふると云ふ懸賞をした、然るに當時は之を行ふ者なく、千八百二十八年に此傍まで來た者があると云ふ事である、南風吹き荒んで居る爲に橇に帆を掛けて進行を早めた。

二十五日。寒氣酷烈であるけれども、天氣は朗である、東風吹き荒んで鼻などは氷つて了ふ、橇の進行は遲いが太陽の光は強くあつて午後寒暖計は零度以下十九度に上つた、午後六時頃大空に虹が現はれた。

二十六日。氣候は零度以下十八度に上つた、アレルト號を出立して以來、此日ほど食物を美味く食した事はない、臘干の如きも喰べられるやうになつた、茶も快く飲まれ、軟き雪の上に體を投げて、而して愉快に手足を伸べる事が出來る、同行者の二三は多量の鼻血を出したが、是は氣候の變化に因るもので左程の危害はないと考へた、夜になつて天幕を張り明日を樂みに其夜を過した。

二十七日。零度以下十六度、初めて華氏の零度以上となつたのである、此夜今まで放擲したる用事の取纒めに掛つた。

三十日。雪は間斷なく降つて居る、彌々進行を速めた。

第二十三章

彌々五月に入つて天候も倍々朗になつて來た、太陽の光は實に麗はしく我々を照し、我々の精神を快活ならしめた、然れども病人は次第に危篤に陷つた。

此邊の淋しさ、我が橇の一隊を見るの外、渺漠として我眼に觸るゝものはない、時としては霧が四邊を蔽ふて咫尺を辨ぜざる事もある、是が晴れんとする時には此間に青白き空を見る位である。

五月三日。寒氣尚ほ退かず、霧深くして進行に困難である、加之時々橇より荷物を下ろして軟き雪の丘を越えなければならぬ、それ故に我々の勞働事務は倍々繁しくなるのみである。

四日。此日は最も悪日であつて、霧深き事非常にして午後は漸く前日來より用意せる道を歩るいたが千二百米突の道を行くに殆ど四時間を費した、風光は前日と更に變りなく我眼を樂ませるやうなものはない、寒暖計は零度以下十七度である、此日初めて氷らざるものを喰べる事が出來た。

六日。晴天病人は此處に至るまで氣力もあつたけれども、此處に至つて、衰弱の極に達して了つた、此病人の爲に進路を妨げる事甚しい彼等は體を動す事が出來ない、人に依つて着物を着、又人に依つて着物を脱がして貰ふ、それゆゑ些細な事までに手を貸して遣らなければならぬ此日途中に一の嶮があつて之を越ゆるには困難を極めた、進むに隨つて北極の邊には困難が薄らぐやうに感じられる、是より進めたならば、大原野があつて、我々の一行は輙く往けるだらうと信じた、此邊に斯くの如き大氷塊或は大氷丘のあるのは浪の衝突より起つた結果ではないかと考へる。

七日。此日も亦た幾箇の氷山を越へた。

八日。天氣は好良にして且つ暖くある、予は病人を太陽の光に中てんとして天幕の外へ連れて來た、此間他の者等は鋤鍬を取つて道路を開鑿して居る、此處で磁針の研究をなした。

九日。天氣前日に同じく好良である、寒暖計は零度以下十八度である、斯の如き日に空しく滯在する事は出來ない、遂に進行する事になつた、二の橇に載せてある荷物を下ろして之に病人を乘せ斯くの如くして千二百米突以上を走つた、ローソン、シンプソン、ヘルブランシュ等は手足に痛みを感じたが幸にして早く治する事を得た。

十日。進む事僅に一吉羅米突勞働者は艱難辛苦の極、進む能はずして悄然として居る姿を見ては一鞠の涙を賤がなければならぬ茲に於て我々は北極の最極點であらうと考へた、病人は次第に增して來る、食物の如きも、最早盡きなんとして居る、アレルト號を出てより茲に三十九日。其殘餘の食物を以て三十一日を支へる事は出來ない、それ故に

是より歸路に着くは最も必要である、神は今日まで我々の盡した職務の如何は知つて居らるゝであらう、不幸にして最極點まで往く事が出來なかつたのは殘念であるけれども、我々が是までの勇氣忍耐を以て此處まで來たのは實に歎賞せざればならない位である。

十一日。四十八時間滯在する事になつた、是は病人及其他の者に充分の休息を與へ且つ自分等が充分の觀察をせん爲めである、食事の後に磁針の檢査に就て充分な觀察を遂げた、又軟き氷を割つて海水の溫度などを測つて見たが、三時間の後に其目的を達する事が出來た、海水の深さは百三十米突ばかりであつた、此邊の海中には如何なる動物が居るかを檢せんが爲一の袋を下ろして見た所、極小なる有節動物のみであつた。

十二日。此日は我々が北極に接近したる紀念として、此處に英吉利の國旗を立てる日である、我々は北極を去る四百ミルの所まで行かうと

した、其數は十人であつたが、食事の後に直に出發した、其他は總て此處に殘つて居る、事になつた、歩行するのであるから其困難は甚しい、時としては雪中に體の半を埋め攀るべからざる氷山の間に入る事などがある、漸くにして二時間に千八百米突を進む事が出來た、正午に休憩をしたが、此處に於て測量をして見ると、北極を去る、三百九十九ミル半の所に到着して居る事が分つた、之を吉羅米突に直せば、北極を去る七百四十吉羅米突の所に來たのである。

我々は之を知つて、殆ど手の舞足の蹈む所を知らざる位であつた、之と同時に黑雲は起つて雪は降り初めた、茲に於て三度萬歳の聲を揚げ、英吉利の國旗を樹て國歌を謳つた、此邊までは如何なる人も探險を試みた事はない。

我々は即ち此地に足迹を入れたる先導者である、是より戻つて天幕の我小屋に歸れば病者は非常に苦んで居る、併ながら最早北極探險の極

點まで來た故に、是より引歸すと云ふ樂みを持つから自然病氣も早く癒するに違ひないと云ふ考であつた、夜ウエスキー一瓶を飲んだ、是は最極點にあらざれば飲まぬと云ふ契約であつた、船を出發してより三日目に打ちたる兎を料理して此ウエスキーを傾けた。

此夜は病人に至るまで何となく面白さうな有樣であつた。

第二十四章

十三日。午前三時彌々南方に引歸すことになつた、我々の目的は一日も早くアレルト號に歸着するのみである、出發前に二の鐵葉製の罐に、我々の此處に來れる有樣及此地の經緯度などを記したるものを入れて二箇所に埋めた、若も後に來し者が之を探し出したならば、最も緊要なる材料を見出すに違ひない、我々は是より道を元來し道に從はんとして其道を探すに汲々として居る、午後の六時より午前六時までを進

行の時間として居るが、是は太陽の光のある中は其光りに浴して睡る積りであつた。

五月の末になつては、此外氣は零度以下であるけれども、天幕の中は二十度より二十五度以上に昇る、殆ど蒸暑くして堪えられない位である、唯だ我々は一時も早く進む事にのみ熱中して居る、暖くなるに隨つて食慾は次第に減じて來る、此旅行の初めに於ては各々好食物を得ん事に汲々として居つて、或はビフテッキ杯贅澤なる食物を喰べたが、今日になつては是等に就て更に食慾を持たぬ、之に反して渴は益々甚しくなつて來る、加ふるに四肢に痛みを感じ夜は殆ど睡る事が出來ない、之と正反對に晝間は暖き太陽の光に浴する事が出來るのみならず、總ての物は氷らずして暖き肉汁を飲む事が出來るのは實に愉快の極である。

十七日。ジョセフヘンリー岬は天の一方に見え初めた。

十八日。氷塊は追々解け初めて來る如くに見える。

二十日。着物の上なる雪などは、今日より解け初めた、次第に荷物は減じ、食料は減ずる故に橇は輕くなつて來る、併し暖くなるに隨つて雪は溶ける爲橇を走らせる事が出來ない、それゆゑ一歩毎に苦まなければならない、此日は女王の生誕日である、暫く停宿し、此處に於て陛下の健康を祝し、而して故郷の方に向つて拜した。

二十五日。氣候温暖なる爲雪は益々溶けて來る、それ故に橇を曳く事は一層困難になつて來た。

廿七日。病人は殖えて七八人になつて來た、併ながら斯くの如く澤山の橇を持つて居つては、輙くアレルト號に歸る事が出來ない、茲に於て一二の橇を捨てゝ進まなければならぬと云ふ決心をした。

二十八日。鳥の鳴聲を聞いた、我々は九月以來鳥の聲などを聞いた事がない、病人の如きも看護人に請ふて身を起して貰ひ、此鳥を眺めて樂しんだ。

二十九日。此日は我々が歐羅巴を出發した紀念日である、一年以前を回想すれば今日との差は幾千であるか、我々は昔日を想ひつゝ睡に就いた。

三十一日。進行中に氷が裂けて一艘の橇は水中に陷つた、漸く之を助けたが危險は增して來るから是れより岸に沿ふて往かなければならぬ。

六月一日。外氣は零度以上一二度になつた、氷は解けて殆ど水となつて居る。

二日。霧深くして太陽を見る事が出來ない、我々は成るべく來た時の道に沿ふて歩るくやうにして居つたが、此日は霧の爲に道を見出す事が出來ない、茲に於て別に道を造る爲勞働をしなければならぬ。

五日。漸く此邊を往來したる足迹を發見する事を得た、茲に至つて、最

早我々の船も餘り遠からざる距離にある事を信じた、而して間もなくジョゼフヘンリー岬の倉庫に到着した、此處に船長ナール氏よりの手簡があつた、之を以て見ると前夜橇に依つて此處へ來られたものと見える、加之アレルト號には敗血病者が起り、ピーターソンは五月十四日に永眠したと云ふ事が書き記してあつた。

此日は三頭の兎を獵する事を得て之を食膳に上げた、此邊には狼の歩るきし跡などがある最早食料は盡きなんとして居るゆゑに、食量を減ずるやうにした、是より三週間を經ざれば船に歸る事が出來ない、併し其距離は六十五吉羅米突に出でないのである、其橇を曳く者の如きも是れより三日以上の勞働をしたならば最早それ以上は働く事が出來ない、茲に於てパール氏と相談をした結果、我々の一人は明朝アレルト號に向つて出立する事になつた、而して充分の看護をしなければ彼等の病人を救ふ事は出來ないと考へた、幸にして予が友は其任に當る事

を諾した、彼は是より單身アレルト號に往くのであるが豺狼或は其他の獸類の居る間を通らなければならぬ、其凄さと云ふものは非常なものであらうと考える。

八日。遂に病人の一人は永眠したが死するまで精神は慥かであつた、之を國旗に包んで而して氷を堀り其處に葬る事にした、其上に十字架を立て後世の紀念とした、此儀式が濟んで此處を出發したが、此日は何となく淋しくして勇氣も沮喪したやうであつて、唯だ一日も早く援助の來るを待つのみである、我々は既に累卵の危きに居るので、勇氣も忍耐も何れへか失せて了ひ、唯だ機械的に道を進むのみである。

九日。朝虹が現はれた、此珍しき虹は我々の魂を慰める事が出來た、我々は之を眺めて居る中に遙か彼方より人影らしきものゝ來ると見た、是は恐らく我々の迷夢であると考へる中に、其影は近いて來る同時に萬歳の聲は聞えた、是ぞ三人の者が橇に乘じて來たのである、之を聞く

我々の悦びは如何ばかりしか、姪、父及醫師は僅かに一箇の橇に乘して我々の方に走り來つた、予は是等の手を握つた時の嬉しきと云ふものは實に今までの勞苦を忘れしめた、病人の如きも嬉しさの餘り出發以來の樣子などを問ひ初める、之加船長及其他の人等も後より來る事を聞いて一層愉快に感じた。

明日は其人等と會合するに違ひない、一同悦びの餘り病苦も忘れて天幕の中に一夜を明した。

十日。船長及其他の船友等は此處に到着された、船員等の語る所に依れば十四日の朝にはアレルト號に歸る事が出來ると云ふ事である、即ちアレルト號を發してより六十二日目になる、併ながら出發する時と歸來する時との差は甚だしい。

出發した當時我々の引き連れて往つた十五人の中一人は鬼籍に入り、其他の十一人は病人となつて今は橇の中に寢て居る、僅に三人が歩行する事が出來るのみである、併ながら此三人と雖ども船に歸ると直ちに養生室に入つて、充分に保養するにあらざれば救ふべからざる危險に陷つて了ふのである。

船に歸つて來ては、非常な歡迎を受けた、先づアレルト號に入るに先つて船員一同萬歳を三呼し船長ナール氏は宗教上の所禮をなして我々の運命を祝した。

第二十五章

アレルト號の歡迎は實に到れり盡せりと云ふ鹽梅である、暖き湯は湧いて居るし、食膳にはシャンパンを添られてある、殊に病人に對する責任を免るゝ事を得て、我々の苦勞は幾分を減じた、彼等は充分なる看護の下に保養し得らるゝやうになつた。

此敗血病には最も新しき肉其他野菜などが最も必要である是等を喰

べる事も出來なかつた爲に、遂に斯かる病氣に罹るやうになつた、在來の遠征せる者等を見るに總て此病に罹り易い、此敗血病に最も効驗あるはレモレであつて、是は彼等を助くる第一の良劑である、それ故に是より八十二度以上の所に遠征を企つる人は敗血病の用意をしなければならない。

十六日。船長は此船員等の病勢に就て演說を試みられ而して是よりデクーヴエルト號と一致せん爲歸路に着く事を公言された、而してデクーヴエルト號を一日も早く英吉利に歸して充分の報告をなさしめ、アツルト號はポートホークに滯在して此邊を充分に觀察すると云ふ考である。

此邊は動物が多い、殊に馴鹿などは繁殖して居る、茲に於て雪解を待ち一日も早く此處を出立する事に決した、此決心は最も當を得て居る事である、到底敗血病者は再度の冬を越す事は出來ない、故鄉に歸つて國

を見るが彼等に對する最大良藥である。

殊に我々の出立以前にアルドリッヒに探險に往つた一隊があるが未だ歸つて來ない、併しながら彼等の探險せる地は兎、鴨又は麝香牛などが居るゆゑに食物の缺ける事はないと信じて居る。

十八日。我々が歸來せしより四日目に姪及父は三人の人等と船を出發してアルドリッヒの隊に遭遇せん爲め出掛けた、我々は日に幾度となく高丘に上つて彼等の來るを待つて居つた。

二十一日。太陽は北方の最終點まで來た、是よりは次第に冬に成るのである、此機を外したならば今一年此地に碇泊しなければならぬやうになる南方を望めば雪は次第に解けて其影を失つて了つた。

二十三日。白き頭の鴨及海燕が此邊を飛ぶを見た、其中の二つを打つて之を食膳に上ぼした。

二十五日。朝の祈禱を濟まして船を出で、小丘の上に登りしに、遠く我

々の朋友が歸來せるを認めた、予は直ちに船に戻つて、吉報を傳へた、之と同樣に船員一同彼等を迎へる事になつた、其一行の模樣も我々と同じやうな鹽梅で僅かに船に歸る事が出來た此人等は船を出發してより八十四日目に歸着したのである。

船中は病人を以て充滿し宛も病院の如き有樣である、それゆゑに、他の者等は看護人の役をしなければならぬ、最早船を動さなければならない、然るに之を動すには船員に缺けて僅に五六の士官と三人の水夫が勞働に堪ゆるのみであつた。

七月一日。病人も大に減じて來た。

五日。麝香牛五六頭を得る事が出來た。

二十四日。我船の傍より大きな水路が開けたのを見た、是より船を曳き出さんと云ふ覺悟である、最早今日より船を下りる事は出來ない事に定つた、此小丘の上には我々が此地に滯在して居たる日記及び船員

の名を記したるものを箱に入れて埋めた。

機關には火を焚き初めた、是は我々が一年以來耳にせざる所である、此處に冬を越したる場所を去る所の哀みは又一層である、船は徐々進行を初めた、此處の景色は今や煙りの中に沒し去つた。

第二十六章

アレルト號は住み馴れたる所を發して徐々南進を初めた、矢張氷塊は甚くして之を出るには餘程の注意を要する、それ故に甲板の上には總ての器具を運搬し置き、萬一の場合に於ては直ちに之を氷の上に投棄して身を免るゝ事の策を講じて置いた、僅かの距離を南方に進むとは雖も其變化の甚しきには驚いた、氷の厚さも比較的薄いが時々進行を止めて氷の通過を待たなければならない、此間船員は船頭に立つて病人等の爲に鮮肉を得んとして居つた、幸にして兎、鴨の如き物を得て病

者に給する事を得た、此邊には兎鴨の類は群を爲して居る故に、一發の下に五六頭を捕獲する事が出來るのである、船中に造りたる庭の中にはクレッソン其他野菜が繁殖して居つて、是も食膳に上ぼすことが出來る。

五日。デクーヴエルト號を距る三十二吉羅米突の所に到着した、船長はエシヤートン及び一人の水夫をデクーヴエルト號に送つてアレルト號の此處に來れるを通告せしめやうとした四十八時間以來、船は大氷塊の間に入つて、頻に之と戰つた、翌日風は倍々吹き暴れて氷を我船に向つて吹付ける。

正午頃ローソン大尉はデクーヴエルト號の船員二人を引き連れてアレルト號に來た、茲に於て我々は彌々デクーヴエルト號に遭遇した、エシヤートン氏は道を失つて十八時間遲れて歸船したが、此時の嬉さは筆紙に悉くすことは出來ない、デクーヴエルト號の船長ステツフン氏の語る所を聞けば實に我々をして竦然たらしむる事が多い、去秋より此夏の初めに至るまで、麝香牛を獵したにも拘らず敗血病は非常に多くあつたと云ふ事である。

殊にグリンランの僻地を探險したポーモン氏の一隊は、是が爲に二人の死亡者を出したと云ふ事を聽いた、是等の事を聞いてアレルト號の船長も長く此處に滯在するは徒らに船員を失ふに至るを以て、遂に船を英吉利に歸すと云ふ策を取る事に決心されたやうである。

殊にポーモン氏探險の結果は、實に好良であつて最早研究する必要はない、デクーヴエルト號の如きも既に數日以前より出發する出意は整つて居る。

七日。危險に遭遇する事屢々であつた。

八日。雨は激しく降り來つて進行に甚だ困難を感じた、以來日々斯くの如くして日を送るのみである。

二十四日。フレーザー岬を過ぎた、雪は再び降り來つて、或は第二の冬籠りをしなければならないやうな工合である、それ故に此邊に建てた食物庫に人を送つて茶砂糖、チョコレートの如きは總て取寄せて了つた。

二十七日。午後六時サヒーヌ岬を過ぎた、以前ブール島に造りたる貯蓄庫を見たが誰も之に手を付けた者はない。

九月九日。アレルト及デクーヴェルト號の二船はスミス海峽を出で、而してイサベル港に碇泊する事になつた、此地に立てたる貯蓄庫を檢したるに二の袋があつた、其一はアレルト、一はデクーヴェルト號に宛てたものであつて、郵便は其中に充滿して居つた。

十二日。是より彌々歸路に付く事になつて、二十五日の夕刻ゴッドフェーブンに船を碇泊する事になつた。

十月二日。此地を出發した。

十六日。我々の一行の消息を確めん爲め英國より派遣されたるパンドール號に遭遇した、此日は天候惡くして到底此バンドール號と通信をする事が出來ない、餘儀なく三艘船を揃へて進んだが、夜になつて霧深く遂に各々其影を失つて了つた。

二十九日。クインスタンに到着した、此處に於て石炭を積み、十一月二十日ポートマス港に歸着する事を得た。

此長き歳月を北氷洋に暮し、酷烈なる寒氣に打勝ちて有益なる探險を爲し恙なく故鄉に歸つた、同胞は擧つて我々の健康を祝して吳れた其歡迎の有樣は到底茲に記する事は出來ない。

北氷洋 終

北氷洋
實價金廿五錢

明治三十三年七月十四日印刷
同　年七月十七日發行

著者　長田忠一　東京市日本橋區通四丁目五番地
發行者　和田むね　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
印刷者　青木弘　東京市日本橋區通四丁目角
發行所　春陽堂　電話本局五拾壹番
印刷所　株式會社秀英舍　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地（電話新橋十八番）

內務省圖書寮
內務省圖書寮文庫之印

82
3

026993-000-4

82-3

北氷洋

長田 忠一／著

M33

ADH-0014